

俺、HP0なんですけど？

アルバティル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2021年1月、神を名乗る人物を名乗る変態と名乗る人物がネット上にあるゲームを公開した。

完全無料のフリーゲーム。

【せかんどわーるど? a? i. 0】

その日を境にして世界は動き始めた。

目次

せかんどわーるど	1
え？ 俺のHP0なんだが？	10
開幕ボス特攻	19
極東の聖人	31
極東商会、始めました！	40
初めてのお友達	49
第二層	54
命の価値	64
ミオン①	72
パーティ	82
上位プレイヤー	90
新せかわ総合掲示板	99
閑話『Sideルア』	112
イプシロン	120
支配人カグヤ	130
おや、最高の鍛冶師の様子が？	138
εのファンターシエ観光記	146

せかんどわーるど

「くくく、フーツハハハ！」

俺は一人で狂ったように笑い声を上げてベッドの上にダイブした。
なぜ俺が笑っているのか？

それは俺の気が狂ったとかそういう話ではなく、今日があの世界初のVRMMO、「せかんどわーるど」のサーバーオープン日だからだ。
ソフトもハードも開幕37分28秒で売り切れ、その後はオークション等で超高値で取引されるだけだ。

150万個製造されたはずなのにこの人気は流石である。

ベータテストの時、俺は指をくわえて見ているだけだったが今回は違う。

ソースコードを組んでプログラムを作成し、予約が始まった瞬間に貯めていたお小遣いを叩いて即30個まとめて購入。

後は手元に届いたら、まだ持っていない奴に超高価格で売りつける。

これで俺は870万円も稼いだ。

楽な仕事だったぜ。

この「せかんどわーるど」の目玉はなんと最初のフルダイブゲームでありながら全五感対応という点だ。

しかも、開発を行った人物はネット上の匿名の存在で、「神を名乗る人物を名乗る変態」という名義で2021年の1月に「せかんどわーるど? α ? 版」というフリーゲームを公開した個人であり、誰の力も借りること無く一人でこのゲームを作り上げたというのだ。

間違いなくフリーゲームのクオリティでは無いとされる程の圧倒的な自由度と綺麗なイラスト、そしてゲーム性に引き込まれたプレイヤーは海外を合わせると2億2000万人にも登るらしい。

どこにサーバーがあるかも不明、一体誰が何の目的でこんなゲームを作ったのかも不明。

完全無料で一切の課金要素がなく、しかも他のゲームより遥かに面白いとあってゲーム会社が何社か潰れる程だ。

RMTが公認だと言うことで専用のオークションサイトまで用意してあり、ゲーム内通貨の「ガルン」は仮想通貨としてかなり有名になった。

日本のコンビニでガルンが使えるようになった時にはかなりニュースになったものだ。

そして、その神を名乗る人物を名乗る変態が公式掲示板である書き込みを行った。

2022/07/21/19:19

投稿者《管理人からの投稿》

【神を名乗る人物を名乗る変態】

おいらが作りたかったVRMMOの『せかわ』ができたお！

お前らβテストするから来るんだお？

1000人までしか応募できないから急ぐんだお？

《βテストへの申し込みはこちら！》

速攻で応募のサイトへとアクセスをしたのだが開幕10秒で既に枠は全て埋まっていた。

そして、そのβテストの参加券がオークションで出てきた時はなんと121億8250万円で落札された。

そして、それ1回しかオークションに出される事は無く、学生の俺がそんな大金を払えるわけもなく泣く泣く諦める事になった。

その教訓を活かして今回はなれないプログラムを作ってみたのだが何とか所持金で買えるだけ買えたのだ。

次の日、妹に誕生日プレゼントとして送ると涙を流しながらお兄ちゃんありがとうと喜んで貰えた。

このVR版で公開される予定の「せかんどわーど1・0」まさに神ゲーなのだ。

現実世界でできることはあらかたできるといふ圧倒的な自由度がまず一番ヤバイ。

頑張れば家を漁るのではなく、家ごとアイテム欄に格納できるくらいの自由度。

今ネット上で公開されている「せかんどわーど? α? 2. 8. 9」と同じくプレイヤーが邪神に幻想の世界へと閉じ込められるというストーリーで、階層を登っていき100階層の邪神を倒せば元いた世界へと帰れるというものだ。

? α?の方では現在12階層までしか進んでおらず、完全攻略まではまだまだ時間がかかるという時にこのVR版が出てきた。

RMTで稼いで生きているプロが数万人もいるこのゲームでVR MMOである。

もちろん、テレビでも大体的に取り上げられて「プロゲーマー専門家達」による予想や新機能等が色々と推測されていた。

このテレビでは「神を名乗る人物を名乗る変態を名乗る人物」という紹介をされるのだが、これは本人が初めてテレビで取り上げられた時に、

2021/01/17/05:05

投稿者 《管理人からの投稿》

【神を名乗る人物を名乗る変態】

テレビでなんか取り上げられたお。

おいらに許可とか取りに来る事もなく勝手にあいつらテレビに上げやがったお。

非常に遺憾だお。

テレビでおいらを呼ぶ時は神を名乗る人物を名乗る変態を名乗る人物と呼ぶようにするんだお！
以上だお。

次にテレビで呼び方が違ったらお前ら全員BANして晒すお。

それ以外に文句はないお、でもテレビ番組にする時にはさすがに許可を求めて欲しかったお（ゝ・ω・ゝ）

テレビで謝罪流したら以降は自由に許可するお。

という投稿が公式の掲示板にあり、それからはテレビで呼ばれる呼び方が固定になったのだ。

ちなみに、ネット上での呼び方は【神変態】とよく略されて呼ばれている。

公式掲示板の用語解説のところに管理人自身が初めから神変態の記事を作っていたらしく、それで統一されたらしい。

「ふう……ようやく後1分か」

VRマシン【わーるどだいばー】を頭にカチツとはめて俺はゲームを起動した。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1……終わりの始まりを始めてよう」

俺がそう言ってゲームを起動すると馴染みのあるキャラメイク画面が現れた。

？α？の方で何度も何度も見た画面。

ここでキャラクターがどういった才能を持っているかを決めるのだ。

『注意』

ATTENTION!

せかんどわーるどではキャラの作り直しはできないよ。
しつかりと考えて良く作ってね？

「ん？ 作り直し不可とかかなりキツめの設定にしたんだな」

とりあえずOKボタンを押して、キャラメイクへと進んだ。

ステータスは？ α ? の時と同じくHP、MP、STR、MAG、INT、DEX、AGI、VIT、LUKの9種類だ。

HPは生命力を表すステータスでこれが0未満になるとキャラクタは死亡する。

一応0未満なので0でも一応問題ないのだが、かすただけで死ぬのでゲームの難易度がハードモードとかそういうレベルじゃ無くなり、一瞬でクソゲーと化す。

恐らく150万人いてもこれを0で始めるプレイヤーはいないはずだ……俺以外。

MPは魔力量を表すステータスで魔法を使えばその分だけ減っていくことになる。

これを0でスタートすると一切の魔法や魔道具の類が使えなくて二階層に上がれなくなり、ゲームが詰む。

STRは筋力量を表すステータスで、物理攻撃に大きく影響したり、装備にも大きく影響するし、これが高ければ所持可能アイテムの最大重量も増える。

STRが0だと何も装備できない上に重量0のアイテムしか持てない事になり、詰む。

MAGは魔放力を表すステータスで魔法の威力や発動スピード、魔法抵抗力に大きく影響する。

これが0だとMPと同じく一切の魔法や魔道具の類が使えなくて

二階層に上がれなくなり詰む。

INTは知力を表すステータスで技能の習得スピードや修得可能量に大きく影響するし、魔法の修得可能量にも影響する。

これが0だと一切の技能を覚えられなくて詰む。

DEXは器用度を表すステータスで、命中率やクリティカルといった所に大きく影響するし、スキルでDEXを要求するものも数多く存在する。

これが0だと攻撃が一切当たらなくて詰む。

AGIは素早さを表すステータスで、キャラクターの移動速度や攻撃速度へと影響を与える。

これが0だと一切の移動ができなくなり詰む。

VITは頑丈さを表すステータスで、キャラクターの防御力に大きく影響を与える。

これが0だと一切の装甲が機能しなくなる為、死ぬ可能性が極端に高まる。

これもHPと同じく最低でも1は振るのが基本だが、HPとは違ってつまずいて死亡とかそういう事は起こりえない為、こちらを0にするプレイヤーはごく稀に、1万人いたら一人くらいはいる。

LUKは運を表すステータスで、ドロップ率等の確率が関係するものへと大きく影響を与える。

LUKだと何もドロップしない上に、自身へのクリティカルが100%で発動する事になる。

AGI回避型にして、不運プレイを楽しむ人も結構いたりするが基本的にオススメはされていない。

この9つのステータスに100の才能ポイントを振り分けるのが俺はもちろんいつものスタイルでいく。

HP : 0

MP : 5

STR : 24

MAG : 1
INT : 20
DEX : 20
AGI : 20
VIT : 0
LUK : 10

ドヤ？

このオワタ式が俺の普段のプレイスタイルだ。

かすただけでも死に、酷い時には風が吹いたというだけで死ぬ。

頭がおかしいと良く言われるのだが、これで続ける事に俺は謎のやりがいを感じているのだ。

プレイヤーランキング7位の妹と違って、俺はエンジョイ勢なので楽しめればそれで勝ちなのだ。

『注意』

ATTENTION!

HPが0だとダメージを受けた瞬間、例えば小石につまづくだけで死亡します。

VITが0だと一切の装甲が機能しなくなり、ゲーム攻略が殆ど不可能に近くなります。

せかんどわーるどではキャラの作り直しはどのような手段を行おうとも不可能であり、才能値を上昇させる手段は一切存在しません。ゲームを楽しむためにステータスを振り直す事を非常に強くオススメします。

それでも本当にこのキャラクターでよろしかったですか？

?YESを押しした瞬間に振り直す事ができなくなるため、ご注意ください。
ださい。

YES/NO

警告が出てくるがもちろんYES。

この後は初期のINT20ポイント分の初期スキル、つまりはスキル2個を獲得してゲームスタートだ。

このゲームには膨大な数のスキルが存在するのだが、初回で選択できるのは余程めちゃくちゃなキャラメイクをしない限りは50程度に収まる。

まあ、俺の欄には264も出てきているのだが……。

選択するのは【格闘】と【軽業】スキルだ。

これを選択しておけば超アクロバットな立ち回りで色々楽しめる。

軽業はつまづいて死ぬ対策で、武器系ではなく格闘なのは柔術専門で戦わなければ殴った時の反動で死ぬからである。

殴ったらどのような武器を使おうともHP0のダメージ判定が入るので死ぬのだ。

しかし、なんと格闘スキルを所得して柔術専門でいくと0ダメージ判定が消えて何とか敵にダメージが入る。

後はレベルを何とか6に上げて、【柔術】スキルを所得していけばいい。

クソゲー状態なのでレベルを6まであげるのにすら1ヶ月近くかかるのだが、それでも達成感が半端ないのだこれ。

「よし、とりあえず妹が帰ってくるまではソロプレイと行くかなあ？」

キャラメイクが完了しました。

ゲームを開始しますか？

YESだ！

え？ 俺のHP0なんだが？

俺がログインしてゲームに参加すると、初期ポップ場所である「始まりの町」へと立っていた。

風、臭い、触感など、あらゆる感覚でこの完璧と行ってもいいVRワールドを味わう。

βの時もかなり好評だったと聞いていたがこのクオリティは半端ではない。

そしてしばらくVR世界と現実世界の違いを確かめっていると空が赤く染り、黒いローブとのっぺりとした白い仮面をつけた奴が現れた。

？α？の方でも最初に出てきたそいつは邪神というキャラクターだ。

「諸君、私は邪神カタハライタイワ。

君達を異世界であるリアネシエ、君たちの言う地球よりこの幻想世界ファンターシエへと呼び込んだ者だ」

名前は片腹痛いわ等というふざけた名前である。

他にも神はいるのだが、基本的に神の名前は酷い。

ちなみに、古代文明の言葉で「嘲笑いし者」を意味する名前という設定らしい。

あながち間違っではない感じはある。

「今私はそちらの世界から149万9958人の人間を招く事に成功した。

諸君はこの世界をVRMMOだと思い込んでいるはずだが、その認識は間違いだ。

ここは真正正銘の幻想世界、ファンターシエである。

その証拠に諸君らのメニュー画面にはログアウトボタンは存在し

ない」

邪神カタハライタイワが手を振ると、強制的にメニュー画面が表示された。

そこには確かにログアウトのボタンは存在しなかった。

まさかデスゲームものを演出してくるとはさすがは神変態さんだ。

「諸君らはこの世界へと閉じ込められたわけだが安心して欲しい。

こちらの世界とリアネシエでは時間は同期しておらず、時間神ラメン・デキルマデの力により、こちらの世界の1年は向こうの世界での1秒となる。

諸君らは向こうの世界の事は気にせず、安心してこの世界で生きるといい。

しかし、諸君らの命は幻想ではなく紛れもなく真実。

これより通常のあらゆる蘇生手段は機能しないものとなる」

時間神ラメンノデキルマデ、つまりラーメンのできるまで。

こいつも酷い名前の筆頭である。

ちなみに、こいつは古代文明の言葉で【時を待つ者】という意味らしい。

1年が1秒とかさすがに設定を盛りすぎだが、そういう設定も面白そうだ。

「諸君らが死亡した時、その命は天界へと召されしかる後に輪廻の輪へと帰還する。

この世界が諸君らに希望をもたらす事を願う」

《特殊スキル【邪神の温情】を獲得しました》

そうやって邪神は消えていった。

感想としてはかなり面白い導入部だったという事だな。

とりあえず掲示板だ掲示板。

この【せかんどわーど1.0】では掲示板システムというものが存在し、メニュー画面からゲーム内専用の掲示板に書き込む事ができる。

掲示板意外にも頑張れば個人のサイトも作れるみたいだが、さすがにそこまでするプレイヤーは極小を通り越して0だろう。

「えーと、公式掲示板って」

ん？

『ガチでログアウトボタンがないんだが？』

ネタスレが速攻で立ち上がるとかお前らノリ良すぎだろ……。

もう書き込み件数が何十件もあり、かなり賑わっているようだ。

【名無し】

おい、ガチでねえんだがwww

【しばぞう】

マジだわ、ついに神変態がデスゲーム作ったぞ。

【名無し】

お前らノリ良すぎな？

【名無し】

いや、ガチで無いんだって、見てみろよ？

【名無し】

は？　って事はこっちの世界で1年過ごしても向こうで1秒しかすぎねの？

【名無し】

知らねえよ、ただゲーム内から外部のサイトにアクセスする小技や裏技の類が全部潰されてるのは確か。

【黒島】

外部ツール使ってる奴いるか？

いるならちよつと外の様子見て欲しいんだが。

【ビーター】

無理だ、完全に対策されてた。
なんか動いてくれねえ。

【ボットマスター】

ボット使えないんだがOrz

【名無し】

あ、ボトマスさんちーつす。

ランキングこれで最下位まで落ちますね。

【黒の剣士】

おい、邪神の温情見たか？

これってHP0調整するとどうなるん？

【名無し】

え？ ちよwwwwww

嫌でも、毒とか火傷とかでは死ぬんちゃう？

【しげる】

というか、隠しステで小数点以下もちやんとあるから最初からステ0じゃないと無理な。

【黒の剣士】

いるわけないだろそんな奴。

?α?でHP0振りしてやった事あるが、何もしてないのにあれ死ぬんだぞ？

【名無し】

だよな……ネタで作る奴も昔は居たがあ警告見てHP1キャラとか作る奴はおらんわな……

50万ドブに捨てるとか有り得んわ。

【タピオカ】

どこかの金持ちがやってるかもしれないぞ？

【名無し】

居ねえだろ、なんか脳波パターンやDNAでアカウントを登録するとか何とかで2アカウント作ることすら出来んのやろ？

「……」

恐る恐るログアウト画面を確認するとそこには何も無かった。

「ろ、ログアウトガチでねえッ!？」

このログアウトボタン以外でログアウトを行うには不正ツールか死ぬか、ゲームをクリアするしかない。

掲示板を見た限りでは不正ツールは全滅の様だ。

とりあえず掲示板にシオン名義で俺は掲示板に書き込んだ。

【シオン】

ガチでログアウト無いですね。

あの邪神の言った事が全部本当だと仮定するならばここはVRMMO内では無いはずですがここがゲーム内であると確認する方法はありますか？

【名無し】

ゲーム内だと確認する術は無い。

仮に邪神が本物ならゲーム内っぽい世界も作れるだろうし、あの神変態なら現実と同レベルの仮想世界でも行ける気がする。

【しばぞう】

そう言えばどこで150万台ものVRマシンを製造できたのかとか、明らかかなオーバーテクノロジーであるVRマシンをどうやって作ったかとか不明だよな？

【名無し】

速報、神を名乗る人物と名乗る変態は本当に神だった。

【名無し】

ま、まだ確定じゃないよな？

(；。∩。∩) ガクガクブルブル

【タピオカ】

確定で良いだろ？

どっちみちこの世界の創造主という意味でもGMという意味でもあいつはこの世界では神だ。

それより、せっかくのデスゲームだぞ？

楽しめよ？

【名無し】

お前らリアルでどうせゴミ以下のニートなんだからせめてゲームの中では本気で生きろよ。

リアルとか気にしたら負けな？

【名無し】

それな、1000年生きてもりリアルじゃ1000秒しか立たねえんだし向こうより長生きできるし、念願の異世界生活。

悪い事なんてないだろ？

【名無し】

確かにそう言われればそうだけど明らかにリアルより死にやすいぞ？

【ビーター】

安心しろよ、圏内で死ぬ事は無いから。

【名無し】

土地購入からの圏内解除、完全決着デュエル、空腹ペナルティ、ジ・アンリミテッドシリーズの圏内貫通。

圏内いても普通に殺せるわ

【名無し】

予想以上に圏内PKあって草

【名無し】

ツール使ってネカマプレイしてる奴、おめでとう。

倫理神の加護と秩序神の加護をオフにすると、女性としてチヨメチヨメできるぞ。

【ボットマスター】

THANKS!

とりあえず宿屋行ってくるわ

【変態☆紳士】

じゃあ俺はその後をついて行ってその宿屋購入して圈内解除すればいいんだな？

【名無し】

変態紳士キター(。▽。)!

【名無し】

変態紳士さんがおる!?

これで勝つる!

【黒の剣士】

へ、変態様だ!?

【変態☆紳士】

とりあえず専用の取引掲示板作ったぞ。

後は知り合いから金集めてWiki作成するからとりあえずお前らも俺に金をよこせ。

後124人で作れる。

えーと、それと2つ名持ちはこれみてたら冒険者ギルド本部まで来い。

速攻でギルド作ってレベラゲして北の攻略を目指す。

某ラノベみたいにな2ヶ月も掛けねえつもりだから安心しておけ。

【名無し】

やっぱ、さすが変態様や!

【リザレ】

変態さん、うちもいつてええの?

【名無し】

変態様が一番簡単な北取るの?

そこは東じゃない?

【変態☆紳士】

〜リザレ

お前も来い、ついでにその黒の剣士とボットマスターも来い。

タピオカは来ても来なくても構わん。

▽名無し

今回は東は無理だ。

慣れてる奴らで先に上行ってアイテムを手に入れまくった方が良い。

どっちみち、東か南のどつちかは残る、なら早く良い武器を量産してフルレイドで東と南を行くのが良いと判断した。

【シオン】

変態さん、βテストの時となにか変化はあつたりします？

【変態☆紳士】

空間解像度が全然違う、それと五感の制度が遥かに高い。

リアルの五感がどれだけ良いかにはよるが場合によってはリアルよりこつちのが上だな。

あと、NPCと会話したら分かると思うぞ。

間違はなくこれはゲームじゃない。

この変態☆紳士というプレイヤーは？α？の方でランキングN01に君臨する人物らしい。

俺はよく知らないのだが、妹がかなりお世話になっているみたいでよく話を聞かされるのだ。

「えーと、そう言えば邪神の温情だっけ？」

特殊スキル【邪神の温情】

HPが最大の状態でダメージを受けた時には必ずHPOで耐える事ができる。

邪神が異世界人へと与えた温情。

え？

俺のHP、0なんですけど……？

開幕ボス特攻

即死プレイを楽しむつもりだったのに、気がついたら不死キャラだった。

な、何を言ってるのか分かんねえと思うが俺にも何を言っているのかさっぱり分かんねえ。

恐怖の片鱗を味わったぜ……。

「さて……どうするか？」

こういう時には妹に相談するのがいいのだが、残念な事にアイツは学校の用事で今日は夕方まで帰ってこない事になっている。

俺がINしたのは午前10時なのでアイツがゲーム内に居るはずもなく、したがって俺がパーティを組みにいくという選択肢も無くなる。

STR極だし、不死身だから初っ端から一番強い東でレベラゲを行うこともできると思うが毒や、火傷等の継続ダメージ系でも邪神の温情が発揮できるのかは非常に気になる。

後、バフで最大HPを上げられて殴るとかいう選択肢もあるのでバフ無効化のデバフを常時付ける【呪われた指輪】か、スキル【呪われ体質】を獲得しておきたい。

頑張れば呪われ体質からの派生系で呪い系のスキルを大量に獲得できるので不死身な上にデバフをばら撒きまくるいやらしい奴が出来る上がる。

目指すのは呪い系拳闘士でいいだろう。

「よし、決めた……東の水辺エリアに突る」

第一層の水辺エリアは他のエリアと比べるとかなりモブが強い。

ついでにボスのグレートアリゲータは間違いなしの1回層で最強の敵である。

そのため経験値もかなり良く、レベラゲ効率としては間違いなく一位だ。

そうと決まれば善は急げだ。

「はあ、はあつ。 マップ広すぎね？」

『悲報、マップめっちゃ広くて移動だけでもかなりかかる』

【名無し】

お前ら、ガチでマップ広いから気を付けておけよ。

100階層合わせると多分日本列島よりも明らかに広いぞこれ

【しばぞう】

そんな広いん？

【名無し】

AGI20のキャラで30分くらい全力疾走してるのに目的地が全然見えねえ。

【名無し】

AGI20か……短剣二本の手数スタイルか、もしくは忍者かシーフか？

【名無し】

近接格闘のAGIとSTR振りの脳筋キャラ。

【たかし】

面白いキャラメしてんな。

わざわざ剣があるのに拳で闘うのか。

【名無し】

柔術は普通に強いのは確か。

普通に殴る気なら剣使った方が強い。

【ナハト】

つ『殴り呪い師』

【名無し】

『殴り呪い師』が良いらしいぞ、さっさと呪われ体質取つとけよ。

【ナハト】

素手最強は殴り呪い師で間違いないと思います。

ただ、今回はデスゲームなのでバフがつかなくなるのはかなりのデメリットですよ。

【名無し】

ナハトさんは今回も素手ですか？

【ナハト】

武器持ったら負けかな？　と思ってますので。

【たかし】

ペア組んでたマイナスダメージヒーラーのあの人は今回おるの？

【ナハト】

今回も居ますよ。

一緒に北目指します。

ナハト、確か？α？の方ではランキング6位かそれくらいのはずで一切の武器を持たずに素手で敵を殴り続けるという俺に結構よく似たプレイスタイルをしている。

彼女のプレイスタイルの殴り呪い師は近接戦でかなりの強さを発揮し、アンデッド以外を相手にする時にはよく使える。

俺のスタイルはこれをちよつと格闘よりに切り替えたものだ。

こうすることで単純な強さは落ちるものの、アンデッドのような呪いの効かない敵も普通に屠れるようになる。

「おお、ようやく水辺エリアに来たぞ……」

進み始めること、かれこれ45分。

いちいち移動にこれだけの時間がかかるとかなんというゲームだ……。
それだけ作り込まれているという意味ではかなり良いと思うのだが、さすがに悲しくなってくる。

「ギョルルルッ！」

「おっと！」

俺が水辺エリアを探索しているとワニの魔物が現れた。

名前はレッサーアリゲーター、レベル4の敵キャラでありそれなりに強い。

「あ、本当に何も喰らわねえや……」

『邪神の温情』の効果でどれだけ噛まれていようが俺には0ダメージ。装備の耐久力が減っていくのはあるが、それ以外では痛くも痒くもない。

「そりゃあ！」

後はワニを適当に死ぬまで殴り続ける。

一発、二発、三発、四発。

「君がッ！ 死ぬまでッ！ 殴るのをッ！ 辞めないッ！」

「ぐ、ギョグア……」

「パフーン」

という効果音と共にHPが0になったワニは光となって消えていった。

「レッサーアリゲーターを討伐しました」

EXP + 40

EXP 40 / 100

アイテム【ワニの肉】

を獲得しました。

「えーと、こいつあと2体狩ればレベルアップか……」

レブラゲをしてからボスに挑んでもいいと思うのだがさっきのワニと戦った感じではこのままでも余裕に行けると思う。

「うし、行くか！」

どこのボスもそうなのだが、1つのボスを倒せばその戦いに参加したプレイヤーはその階層の別なエリアに居るボスに挑戦する事ができないという設定がある。

要するに最初にレギオンレイドを組んで無理やり北を討伐して、上の階層でレベルを上げて2層も北を突破して、3層でレブラゲをしてから1層の他のエリアのボスを討伐する。

という手法は取ることができない。

全てのエリアのボスが討伐されればボスを討伐していないプレイヤーも上の層へと上がる事ができるようになる。

そうやって全てのエリアのボスを倒すまではボス討伐に参加したプレイヤー以外はどのような手法を用いても上の層へと登ることはできない。

ボスには6人×16人、計96人で挑むのが最大なので最初の3ボスを討伐した288人は他のプレイヤーと比べてより上の層でレブラゲができるという非常に強い特典を得ることができる。

「グルルルッ！」

「邪魔だッ！」

不死身の身体を使って全速力で俺は東を目指していく。

水辺エリアの中央、グレートアリゲーターの居る場所まで軽業スキルを活用してそのまま走り抜ける。

「はあ……はあ……うえ。」

「やっぱりマップ広すぎだな」

俺がこうして焦っているのは他のプレイヤーから身を隠すためである。

デスゲームの中、一人だけ不死身。

問題を産むのは当たり前だ。

なんか色々と言われるのは嫌だし、そういった面倒事の結果他の奴らが俺にアイテムをたかったりする可能性も十分にある。

俺はそういった面倒事は全力で避けたい。

鑑定を防ぐ隠蔽スキルや偽装スキル、もしくはそういった能力が付与されたアイテムを獲得するのは急務と言えるだろう。

そして、正体を隠す為には仮面やフードといったものも必要になる。

二層の邪神教会で販売してある「邪神の仮面」はさつきと手に入れて起きたい。

邪神の加護が付いている仮面で耐久力が無限だからだ。

他の仮面でも問題ないと言えば問題ないのだが、耐久力無限大のこの仮面は戦闘中に耐久力が0になるのを防いでくれる。

フードも耐久力無限のものが好ましいのだが、ローブ・オブ・エターナルとかそういったアイテムがあるのかどうかは知らないがどっちにせよSランクのアイテムであり、手に入れるのが10階層以降に

なってしまう。

こちらは適当に店売りのものを必要に応じて買っていけばいいだろう。

「お、ボスエリア発見だな……」

ボスのエリアはどこも場違いな感じのある門がポツンと立っている。

洞窟や迷宮といったエリアのボスであればかなり雰囲気のあるものになるのだが、残念な事に沼地に門があってもピンと来ない。

門に手を触れると

『ここは第一層東エリアです。』

ボスに挑戦しますか?』

という画面が表示された。

「もちろんYESだ」

俺がそう答えると門がギイイツと音を立てて開いた。

中は普通に水辺エリアの続きのような場所が広がっていた。

それなら最初からボスを水辺エリアに置いとけよとも思うのだが、エリア外からボスを攻撃するなんて方法を取ることまでできてしまうため、こうして隔離されているらしい。

「グルルル、グガアアアアツ!!!」

「おおお!!? かなりの迫力」

俺が門の中へと足を踏み入れると塗ったどこからともなくグレートアリゲーターが現れて大きく雄叫びをあげた。

HPバーは4本。

一番強い東エリアだけあってゲージ数がかかり多い。

取り巻きはバーサクアリゲーターのLv8が64体。

さすがレギオンレイドが前提なだけあって規模も強さもヤバイ。

Lv8というのは二層の敵のレベルと同じくらいだし、ボスのバーサクアリゲーターは2層の北ボスよりも強いらしい。

「たつく……明らかに一人で倒す規模じゃ無いなあっ!？」

「グルルル、フサガアツ!？」

まずはボスは放置で取り巻きを始末していく。

俺のHPは減らないし。

取り巻きに集中しても問題ない。

「グルルル、フシヤアアア!？」

「うおっ!？ アシッドブレスかよ!？」

アシッドブレスは相手に毒を付与するブレス系のスキルで、爬虫類系のモンスターはかなりの高確率で使ってくるのだ。

あれ!？

毒？

ちよ、え!？

邪神の温情って毒で貫けるんじゃないかなかったけ？

そう思っただけでHPと状態異常、そしてログを確認してみるのだがどうやら毒や火傷、呪い、部位欠損といった継続ダメージや状態異常も防げるらしいぞ。

「よ、良かったあ……死ぬかと思った」

「グルルル!？」

いつの間にか取り巻きに囲まれていたので軽業スキルを利用して

取り巻きを引き離し、ボスの周りをぐるぐると回るようにして取り巻
きを綺麗に並べてやる。

「さて、お前ら……地獄に落ちる準備は良いか？」

投げる、投げる、殴る、投げる、殴る、殴る、殴る。

1匹1匹の取り巻きをちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返す
が、数が多いせいで全然減ってくれない。

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

レベルが上がりました！

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP1000/2000

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP1800/2000

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

レベルが上がりました！

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP1400/3000

経験値がごりごりも増えていき、レベルが上がっていく。

右からくるワニをそのままの勢いを使って左に投げ、前から来るワ
ニを後ろに投げ。

拳と蹴りで牽制する。

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP220/300

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

レベルが上がりました！

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP80/500

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

EXP+80

EXP160/500

「あと、55体ッ！」

「グルルル、ガヤアア！」

逃げ周り、

転がり、

ボスの攻撃を避け、

確実に取り巻きの数を減らしていく。

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

【バーサークアリゲーターを討伐しました】

レベルが上がりました！

その度に俺のステータスが伸び、さらに次のステージへと進むことができる。

必要経験値は1000から始まり、そこから10レベルに到達するまでは1.5倍して十の位を切り上げたものとなる。

1000、2000、3000、5000、8000、12000、18000、27000、41000という風に。

レベル10からは経験値の増加が緩和されていくのだが、それまでは1.5倍以上と一気に伸びにくくなって行くのだ。

だが、俺が全ての取り巻きを倒し終える頃にはレベルが8まで伸びていた。

【シオン】性別：♂

Lv8

EXP260／2700

『ステータス』

HP：0／0

MP：85／85

STR：40

MAG：1

INT：34

DEX：34

AGI：34

VIT：0

LUK：17

『スキル』

格闘、軽業、【選択可能】

ステータスは基礎ステータスの10%がレベルアップ時に加算される。

俺のステータスはHPとVITに1つも振り分けていない為、同レベルの人と比べるとかなり高い方だと言えるだろう。

スキルは一体何を選択するべきか。

呪われ体質で死亡確率を0にするか、隠蔽スキルで身バレを防ぐか
……

「グルルルッ！」

「うおっ!? ちよ、待てよ！」

いきなり殴ってくるんじゃないよ！」

ワニがめんどくさいのでとりあえずここは【呪われ体質】でいいだろう。

隠蔽スキルはとりあえず放置で問題ないと思われる。

上位の鑑定でなければ自分よりレベルが1.5倍以上高いキャラを鑑定する事ができないという性質上、俺を鑑定する事のできる奴はこんな初日でレベル6まで上げた奴だけという事になる。

そんな奴は最強の廃人プレイヤーのあの変態☆紳士以外にはいないと思いたい。

「さて、ワニの王様よ……地獄に落ちる準備は良いか？」

「グルルルッ！」

殴る、殴る、殴る、殴る。

ノックバックが付いている攻撃以外は完全にスルーをしてひたすらに殴り続ける。

そうして、かれこれ開幕7時間で俺は東のエリアのボスを討伐したのだった。

極東の聖人

【グレートアリゲーターを討伐しました！】

EXP + 4000

レベルが上がりました！

EXP 1560 / 4100

アイテム

【ワニの皮】 × 20

【ワニの肉】 × 40

【グレートアリゲーターの牙】 × 4

【グレートアリゲーターの骨】 × 4

を獲得しました！

ラストアタックボーナス

【ワニの宝玉】

を獲得しました！

お金

105万6000G ガルン獲得しました。

エリアボスを討伐しました。

プレイヤー名を公開しますか？

これはNOだな。

プレイヤー名を隠したり偽ったりする手段はあるにはあるがめんどくさいのでここで隠しておいて損は無いだろう。

『第一層、東エリアのボスが討伐されました！』

俺がNOを選択すると、システムアナウンスが大きく流れた。

YESを選択していたらボスが○○に討伐されました！

みたいな感じが出るのだが残念ながらここを偽名にする事はシステム上できないのだ。

「105万6000ガルンか……一気に大富豪だな」

だいたい1ガルンで1000円程の価値を持っている為、だいたい1億円という事になる。

うん、ヤバイ。

本来はレギオンレイドで倒すボスなので1人あたり1万10000ガルンくらいのを独占したわけだ。

これだけあれば余裕で家、というか城が買える。

ゲーム内で使う分には1ガルンでだいたい10000円相当らしいので10億円相当、もうこれだけあれば好き放題やり放題できる。

NPCを雇って店を開き、商会でも作るべきだろう。

かなり割高で上層のアイテムを販売したり、アイテムの買取を行ったりするのだ。

始まりの町の商業ギルドと錬金術ギルドでNPCを雇いまくってアイテム作成の自動化、後はプレイヤーが格安で泊まれる超巨大な宿の設置。

ついでに大きくなれば鍛冶ギルドにも手を出して行けばいい。

「ヤーてきて、行きますか」

□□

『おい、東討伐したの誰だよ!』

【変態☆紳士】

開幕7時間で東を討伐しやがったチーター誰だよ!?

【名無し】

素人すぎてよく分からん、どのくらい凄いことなの?

【名無し】

江戸時代に一人で高性能なスマホ作るくらいヤバイ。

【ビーター】

チーターじゃねえと思う。

仮にそいつがチーターなら世界最強クラスのハッカーをナペプできさる。

【変態☆紳士】

考えられるのは反応速度がクソ高いプレイヤーか、俺よりヤバイプレイスキル持ち、HPO、チーター、高度なAI、神変態による演出、この世界の人間による討伐、バグ、リアルチート持ちとかだな。

【タピオカ】

会議でHPOとチートは無いって結論出ただろ？

バグならすぐになんかあると思うし、超ヤバイプレイヤーでもいるんじゃない？

【名無し】

変態☆紳士氏ならワンチャン行けるやろ？

前の闘技場イベでレベル1キャラでグレートアリゲーター倒すとかいう動画出てたろ？

【名無し】

ああ、変態様の自作自演か……乙。

【名無し】

▽ 変態☆紳士

お前以外に誰がそんなことできんだよ、自作自演乙。

【変態☆紳士】

いや、俺会議終わった後に黒の剣士とソピア連れて速攻でレベラゲしに行ってたんだが……。

あとグレートアリゲーターは取り巻きが多いから単身じゃまず無理だ。

レイドみたいな組織が東に向かったって情報は無いから恐らく6人以下のパーティだな。

【名無し】

六人でもこの短期間でアレ倒せるって相当だぞ？

VR慣れしてないと無理ゲーだからβテスターな事は間違いない

だろ。

【リザレ】

変態さんを超えるプレイスキル持ち6人……

βテスターを片っ端から訪ねていけば分かるんやない？

【名無し】

俺東見てたけどβテスターのパーティとか来てないぞ？

恐らく単身だろ。

【変態☆紳士】

……ちよつと今から南を単身攻略してくるわ

【リザレ】

変態さん、やめときなて。

変態さんならいけるとは思うけども死んだらそこで終わりなんやで？

【名無し】

変態さんが会議とかせずに直でレベラゲして単身で東に行ったとしたら7時間で攻略できる確率どのくらいあんの？

【変態☆紳士】

死ぬ気で行っても恐らく勝率は3割くらいだな。

2つ名持ち6人でパーティ組んでも4割。

【名無し】

5人増えても勝率が1割しか変わってない件について。

【名無し】

さすが変態様、俺たちに出来ないことを平然とやってのける！

【黒の剣士】

東の人と変態様ってどっちが強いんだ？

【名無し】

俺も気になる、東の人も強そうだけどあの変態様が負けるところが想像つかねえ。

【変態☆紳士】

分かんが、向こうはもう二層でレベラゲしてる事を考えると俺でも勝てんな。

2つ名でも付けるか。

【名無し】

普通に東の人でええんやない？

【変態☆紳士】

俺の2つ名が『万戦万勝』で黒の剣士が『絶剣』やぞ？

東の人はさすがに無いだろ。

【黒の剣士】

『極東の聖人』で良くね？

元ネタは言わなくても分かるな？

【変態☆紳士】

プレイスタイルが明らかになるまではそれで固定しとくか……。

【Wikiの副管理人】

速報、新英雄の2つ名は『極東の聖人』

Wikiに載せといたぞ。

□□

えーと、邪神教会は……。

そろそろ時刻は夕方、グレートアリゲーターを殴り殺した後。

二階層の西エリアにあるルメーファの町まで来ていた。

ここのルメーファは邪神教会によって統治されている町であり、無信仰のプレイヤーもしくは邪神を信仰しているプレイヤーしか入る事ができない町である。

始まりの町と比べると大きさは全然違って、始まりの町は1つの市よりも遥かに巨大だったくらいなのに、こちらは至って普通の町のサイズである。

Wikiを見て調べて見ると、始まりの町はゲーム内で最も大きい町だとされており、調べたらなんと直径40kmもあるらしい。

ちなみにそれぞれの階層の広さは直径200kmで100階層全

てを合計すると1257万平方キロメートル。

ヨーロッパよりデカいが南極大陸よりは小さいくらいと予想していたより遥かにデカいらしい。

「あ、ここが教会か……」

俺が立派な建物を見てそう呟くと掃除をしていたNPCらしき女性はやってきた。

そう言えばNPCと会話したらこの世界がゲーム内かどうか分かるんだったな……。

「はい、ここは闇の神カタハライタイワ様の教会ですよ」

「あ、ご丁寧にありがとうございます。」

邪神の仮面が欲しいのですが、いくらで買えますか？」

「失礼ですが、教団証はお持ちですか？」

「いえ、持っていません」

「でしたら1000ガルンほど喜捨して頂ければ」

1000ガルン……リアルで10万円でゲーム内なら100万円か……。

高くね？

仮面一つってそんなするものなのか？

耐久力無限の仮面だから100万してもおかしくはないのだが、？

α？版の方ではプレイヤーが50ガルンくらいでよく販売していたのを覚えている。

……会員になると10ガルンくらいで買えるのではなからうか？

「なんとか500ガルンくらいになりませんか？」

「規則ですので、教会に加入して信徒になってくださるのであれば非常にお安くなりますがどうなされますか？」

「……1000ガルスです」

「ありがとうございます」

確かにこれはAIが入っているとかそう言うのを超えてるな。

まるで生きている本物の人のようだ。

いや、実際にそうなのかもしれない。

この世界の人はこの世界で生まれ、そしてこの世界で今まで生きてきたのではないだろうか？

「さすが100万円、仮面のつけ心地は最高だな……」

後は適当に店でフード付きのローブを買い、装備！

これでどこからどう見ても完全な不審者である。

邪神教会所属の暗殺者がたしかこんな格好だった筈なのだ。

見るからにヤバいやつで、実際にHP0のヤバいやつだ。

後は日が落ちた時の対策に光の魔石という懐中電灯代わりのアイテムを買い込んでおく。

「よし、とりあえずは隠蔽目指してレベラゲしてくるかな？」

鑑定対策は必須だし、後2レベでレベル11になる。

東にまた突っ込んでレベラゲしまくればすぐに上がるだろう。

なにせ、安全マージンを取る必要性がないのだ。

無理やり突っ込んで相手が死ぬまで殴るだけの脳筋プレイができる俺のみに許された高速レベラゲである。

仕様が変わっていないければ10以降は1.3倍で10の位からは切り捨てになる。

つまりは10から11にあげるには5300経験値で、のこり後7840経験値が必要だと言うことになる。

ワニ100体分、多分まだ余裕だ。

次の16までは万単位の経験値必要になってくるので、ちよつと怠くなってくるがまだまだ序盤という事もあり、レブラゲは容易である。

問題は俺以外のソロプレイヤーだろう。

死を覚悟してレブラゲを行う必要がある。

普通のプレイヤーならばそのレベルの敵と安全に戦って勝つ為にはソロだと+5が必要でパーティを組んでも同レベルの敵としか戦えない。

最初からソロだとレベル1のゴブリンすら互角の戦いとなり、死ぬ可能性がある。

経験値は自分とのレベル差があればペナルティが課せられる。

ソロで安全マージンを確保できるのは自分よりも5レベル低い相手だけで、そのレベルの敵に集中して狩りを行っても経験値はあんまり入らない事になる。

—5レベルの敵とソロで戦った場合と、六人でパーティを組んで同レベルの敵と戦った時の経験値のどちらが高いかなんて言うまでもない。

このゲームはパーティを組んだ方が基本的に強くなれる性質があるのだ。

掲示板を見た限りはソロで有名だったあの変態☆紳士さんですらパーティを組んでいるみたいだし、コミュ障のソロプレイヤーには絶望の未来しか待っていないだろう。

「とりやあー！」

「シャーツ！」

第二階層の東エリアは大草原、それぞれのマップには名前も付いているのだが名前は言わなくても分かるだろう。

そう、ワロタである。

6層にはフカヒの大草原というマップとあるらしい。

出てくる敵はどちらも同じで蛇だ。

レベルは8〜12と少し振幅あつて死ぬ危険性が高く、そこまで狩りには適さないらしいが俺には関係ない。

日が落ちてもう光の魔石しか明かりが見えない中で俺は走りまくる。

同レベル台の敵だけを狙って倒し、経験値を稼いで稼いで稼ぎまくるのだった。

極東商会、始めました！

図書館で一人、黙々と本を読んでいると一人の男がやって来た。

名前はジータス、情報屋として非常に有名な人物でプレイヤーランキングの上位には入っていないものの『情報屋』の2つ名を持っている。

彼以上にこのゲームについて詳しいと言いきれるような人は恐らくいないだろう。

細かな裏設定から、表のあらゆる設定を頭に叩き込み、一度覚えたものは絶対に忘れないという驚異的な記憶力は目を見張るものがある。

Wikiに記載されている情報はなんと彼一人により提供されたものだ。

「聞いてよソピアちゃん、中央区にすつごい安い宿ができたんだ！」

「何それ？」

「えーとね、極東商会とかいうプレイヤーが作った商会が運営してる宿屋で一番安い部屋は1泊1ガロンで泊まれるらしいよー！」

「1泊1000円？ カラオケボックスでフリータイム取って寝るくらいには安いわね」

「そうそう、それに上の層のアイテムも売っているらしいんだ！」

「っ!?! きよ、極東の聖人が商会をやってるの!?!」

極東の聖人、このデスゲームとなった世界で唐突に東エリアを攻略し有名になった人物だ。

そんな人が何故一階層で商会なんかを開いているのだろうか？

普通に考えれば、彼が一階層に降りて商売をするメリットは欠けらも無い。

初心者支援でも行いたいのだろうか？

まさに聖人の2つ名が相応しい。

「え、えーと、NPCを大量に雇ってるみたいだよ。」

商業ギルドと錬金術ギルドで聞き込みしたんだけど、仮面をつけた黒いローブの人が来てみたい」

「仮面をつけた黒いローブ……もしかして邪神教の？」

「そうみたいだよ、あの邪神がつけてた仮面によく似てたって」

「邪神教会に加入したのか、それとも1000ガルンを投げ捨てても問題ない程の財力があるのか……どちらにせよその人と話をつけて貰える？」

「?α?でプレイヤーランキング9位だった『魔弾』のソピアが話をしたいと言えませんがに断られないはずよ」

「変態☆紳士さんにはどう伝えようか？」

今は東エリアで単身レベルゲしてらみたいけど……」

「とりあえずこの話を伝えて、変態☆紳士さんにも別にアポを取るよ
うに頼んで貰える？」

私が断られたとしても彼との話し合いに応じないなんて事は無い
はずだから」

「じゃ、じゃあ行ってくるね！」

□□

ゲームが開始されてからなんやかんやあってもう5日目、プレイヤーの平均レベルは情報屋の調べによると2.8らしく、そこそこ伸びたのではないだろうか？

いや……5日目でもレベル2.8と言うべきか？

元々このゲームはレベルを上げにくいゲームではあるのだが、デスクゲームがさらにそれを加速させているのかもしれない。

だってレベル1ならゴブリンすら安全に倒せないんだぜ？

通常の?α?版ではゾンビアタックが効くため、ソロでもある程度の攻略が出来るのだがそれも不可能となると、パーティを組んでソロとレベル上げをするしかない。

ついでに今回はサーバーが1つしか無く、プレイヤーが密集してしまい、狩ることのできるモブに限りがある。

つまりは強くなりたいたいなら命を賭けて東エリアの高レベル帯に突っ込む必要がある。

一番東にある7、8レベルの敵がいるエリアにはさすがに人は少ないというかほぼ居ないのだが、低レベルな状態でそんな場所に突っ込むなど、余程のプレイヤースキルがなければできないわけが無い。

この一番奥にレブラゲのしやすい狩場があるという情報をWikiで見つけたのが俺がレベルを11まで上げた後だ。

せっかく真夜中に光の魔石を使って同レベルの敵を探して狩っていたというのに、高レベルの敵が集まっているエリアが二階層にもあったのだ。

涙を流して泣いたぜ。

あの後、真夜中に転移で始まりの町まで帰ると物凄い数のプレイヤーが円陣を張って転移してくる奴を見張っていた。

一体どんな奴がああ東のボスを倒したのか興味本位で見たいやつが集まっていたのだとは思うがこっちからしたらいい迷惑である。

質問攻めにあいそうだったので必死に格闘スキルと軽業スキルを駆使して無理やりに突破して、全力で街の外まで出て全員を撒き終えてから装備を変えて町に戻った。

それからはこっそりと宿屋で仮面とローブをつけて、商業ギルドと錬金術ギルドに大金を払ってNPCを大量に雇い、始まりの町の中央エリアに超デカイ宿屋を金に糸目をつけずに建ててやった。

宿屋は地下の超格安エリアと一階の普通のエリアと二階の高級エリア、三階の超VIPエリアに分けてある。

普通エリア以上に泊まればなんと三食セットでついてくるというお得な特典もある。

ついでに、宿屋の横には錬金術工房と店があり店では錬金術で作ったポーションや俺が狩ってきた素材を大量に販売している。

どうやらポーションの需要がかなり高いようで毎日毎日飛ぶように売れている。

ここまで色々やれば色々面倒な事ももちろんやってくる。

例えばクレーマーや、某小説のあの関西弁の人のような奴だ。

いきなりアイテムを無料で配布しろとか、ビギナーを助けろとか言われたりすると、なんとというかこう……無性にぶっ殺したくなってくるのだが、我慢して敷地内立ち入り禁止で済ませておいた。

それからは宿屋や店でごねるのはヤバいと思ったのか、俺と直接話し合いたいとかいう奴が何人も来ている。

くっそ面倒臭いし、何を言われるのかは明白なので全部まとめて却下だ。

ついでに代表役を一人商業ギルドから雇って、支配人という名目で配置。

俺の手を借りずに動き続ける永久機関が完成した。

支配人ちゃんはかなり有能で、ポーションの価格の設定やアイテムの価格の設定も全部相場を調べ、緻密に計算して設定してくれる上に、クレーム対応まで完璧にこなしてくれる。

さすが月5千ガルの少女である。

他の定員は時給1ガルンもあれば雇えたのを考えると彼女の性能がよく分かる。

一番安いのは奴隷で200ガルンほど最初に払えば後は維持費だけで、無給で働いてくれる。

極東商会の部屋1つと三食を与えるだけで普通に1日8時間は働いてくれるので普通に現金で払うのであれば日当で2ガルンくらいだろうか？

日当2ガルン、時給換算で2500シルンつまりは250円。

しかも、奴隷達はその雇用条件に満足しているらしく、一切の不満もなくむしろ喜んで働いてくれている。

錬金術ギルドの方は全員を完全出来高制で雇っている為、こちらに損が出ることは絶対はない。

時給で雇う事もできたのだが、支配人ちゃんがこちらの方が良いと言ったのでそういう風に変更したのだ。

後は放置で金が飛ぶように入ってくる様になった。

二ヶ月くらいの間、このままの売り上げが続くのであれば土地代と建物代にかかった費用の回収ができる。

そこから先は他に支店を増やしたりして、完全に無双タイムのスタートだ。

「ふう……紅茶うめえ」

そろそろ二階層のボスを倒しに行ってもいいのかもしれないが、色々と働き詰めだったので今日1日はこうして喫茶店で優雅に紅茶を飲みながら掲示板でも触っているつもりだ。

「喫茶店も作っても良いかもな……」

始まりの町の中央区をもう完全に制覇する勢いで色々やってもいいのかもしれない。

あと、未だにかなりのプレイヤーが転移の広場にたむろしており、なかなか二階層に行く事ができないので、もしも改善されなければ中央区の転移の広場を1000万ガルン出してでも買い取る事を考慮してみるべきだろう。

一度買ってしまったばプレイヤーが転移する度に何ガルンか税金の様なものを設定できる為、そのプレイヤーが圧倒的優位に立てるのは間違いないのだ。

わざわざ転移結晶を買えば転移の広場を使わずに転移する事も可能なのだが一回一回それなりの値段がする転移結晶を使えば合計でかなりの金額を消費する事になる。

一回1000ガルスはやはりどう考えても大きすぎる。
月に5回以上使うのであれば支配人ちゃんクラスの人をもう1人雇える事になるのでどうにかしてあいつらを散らせたいもの。
とりあえず掲示板に書き込んでみる。

『転移の広場で屯してるゴミ共が邪魔臭いんだが』

【極東の聖人（本物）】

アイツら圏外に弾き飛ばしてPKしたいくらいウザイんだが。
誰か規制してくれないだろうか？

一週間改善されなければ転移の広場を買い取る事も考えるんだが。

【名無し】

偽物乙。

【極東の聖人】

アイツらほんとクソだよな。

俺も迷惑してるんだよ。

【変態☆紳士】

今度こそ本物のだと信じて書き込むんだが、もし良ければ俺とデュエルしないか？

別にデュエルじゃなくてもいいんだがとりあえず直接あつて話したい。

冒険者ギルドに俺か俺の代理がいるから訪ねてくれ。

【極東の聖人】

断る。

俺は誰かと馴れ合うつもりは無い（・ω・）キリッ

【極東の聖人（本物）】

変態さん、要件があるならここで言ってくれ。

ちなみに俺が本物だという事は明日の昼までにあいつらを退けた

ら証明してやる。

【変態☆紳士】

あそこにいる奴をwikiと取引掲示板使用禁止にするくらいしかできんぞ？

言っておくがああの自称解放者共にはこんな脅しは効かんから無理だぞ？

【極東の聖人（本物）】

それだけしてくれば十分だ。

後はこつちで突っ込む。

ついでに後3時間で宿屋の食堂でホットドッグの販売が開始される事は証明になるか？

【変態☆紳士】

なる、直接あうことはどうしても無理ってことKs？

【極東の聖人（本物）】

そつちには鑑定と看破持つてる高レベルプレイヤーがいるから無理だ。

【変態☆紳士】

打ちミスすまん。

会えないならそれでも構わんが、ビギナー用の格安宿だけは続けてやってくれ。

3日後に俺も二階層に上がるつもりだからそこで追いついたらデュエル申し込むわ。

【極東の聖人（本物）】

残念だが俺はその時には三階層に進んでるつもりだ。

【変態☆紳士】

そうか、さすがにキャリアしながらだと追い付けねえか。

【名無し】

本物ぽくて草wwww

【名無し】

おい、あの偽物野郎消えたぞ

【黒の剣士】

▽変態☆紳士

変態様は96人で上がる気なんだろう？

単身で上がってる聖人に勝てるわけ無いだろ。

【極東の聖人（本物）】

追いつく意味も無いから自分のペースで上がってこい。

毎回95人も引つ張りながら俺に追いつけたらガチでビビるぞ。

【変態☆紳士】

攻略組から死者を出したくないからな。

単身だとレベル1でも南なら100%勝てるんだが……

紙装甲の奴とかもいるレイドの方が死者0は難しいんだよな。

ああ、そうだ。

ギルドのところにも書いておくが、北ではなくやっぱり2番目に強い南を攻略するつもりだ。

動画にして上げるつもりだから、もし良かったら見てくれると嬉しい。

アドバイス等あれば待ってるぞ

【極東の聖人（本物）】

変態さんにアドバイス必要か？

【名無し】

それな、変態様にまともなアドバイスができる人とかいるわけが無い。

【黒の剣士】

聖人もかなり強いプレイヤーだぞ？

最初に帰ってきた時に俺も実はいたんだが近接格闘型では間違いない最強だな。

あのナハトを多分舐めプできるレベル。

【名無し】

まあ、極東の聖人とナハトならそりゃあ聖人が勝つだろ常識的に考えて。

問題は変態☆紳士と聖人のどっちのプレイヤースキルが上かだ。

【変態☆紳士】

極東の聖人の方が上なんじゃないかと本気で思い、自信を無くすこの頃。

「よし、まさか変態☆紳士さんが出てくれるとは思わなかった」

適当に5ガルン払って「極東の聖人（本物）」というアカウントを作って書き込んでみたのだが、どうやら変態☆紳士さんが手を出してくれるみたいだ。

いよいよ明日は第二階層の攻略だな。

初めてのお友達

デスゲーム開始から6日目、第二層の東エリア攻略の予定日である。

変態☆紳士さんが動いてくれたみたいであれからかなりの人数が減ったのだが、それでもまだ40人くらいのプレイヤーが屯してる。

俺が出禁にしている奴らで解放者とかいう名前を名乗っているキチガイ共だ。

転移の広場が半径150メートル程の円形であり、ああやって綺麗に陣取られている事を考えると見つからないように転移を行うのは無理ゲーである。

「はあ……宿屋からダッシュするか」

このまま突っ込んだら確実に正体がバレる。

一旦宿屋に戻ってから極東の聖人モードに着替えて全力疾走して切り抜ける。

多少の情報は明らかになってしまふのだろうが、それでもせっかくな人払いをしてくれたで行かざるを得ない。

「うお!?!」

宿屋と転移ができる場所までの距離はだいたい250メートル。

善は急げと宿屋に走り出そうとしたところで曲がり角から出てきた誰かとぶつかった。

「あう……い、痛いです」

どうやら女性プレイヤーにぶつかってしまったみたいだ。

水色の髪に水色の瞳の超が付くほどの美少女、いや年齢を考えると美少女だ。

恐らく10歳くらいだろうか？

初心者装備に身を包み、地面に座って頭を押さえている。

(こ、これが恋か!?)

キャラクターの容姿を作る方法は3つあり、現実の自分の体をコピーする方法と？α?の方で作ったキャラクターをこちらに移す方法、そしてキャラメイク時に様々なパーツからキャラを懇切丁寧に作り上げる方法だ。

ついでにランダム作成と高いアイテムを買えば整形という事もできるのだが、それはお前の様なものだ。

さて、改めて彼女を見てみよう。

水色の髪で水色の瞳の日本人がリアルにいるだろうか？

いや、いない。

?α?の方ではここまで詳細なキャラメイクができないらしいのでこれもない。

つまりは彼女はこのゲームにてこの容姿を作ったという事になる。

しかし、掲示板を見る限りでは自由度が余りにも高いせいで物凄く作成難易度が高いらしく、超イケメンキャラや超美少女キャラといったキャラクターを作ることとは無理ゲーらしい。

(天才、天才だな……)

まさに彼女は天からの才を与えられた少女に違いない。

身長や体型などを大きく変えるときもに体が動かさなくなるらしいので、実際に彼女は見た目通りの年齢なのだと思う。

それを考慮するとますます天才という言葉が相応しいな。

「ごめん、大丈夫か？」

「は、はい、大丈夫です」

ああ、良かった。

大丈夫なようだ。

ってここは圏内だから、HPが減ることはないのか。

「君、一人でこのゲームに参加したのか？」

お父さんやお母さんは？」

「あ、良くそう言われるんですけど、私は子供じゃないですよっ。」

「いや、どう見ても子供だろ……キャラメイクで無理やり小さいキャラでも作らない限りは……」

「え、えと、これリアルのままです」

「は？ その容姿で？」

「ひゃ、ひゃい！ う、嘘じゃないですよっ。」

「……マジかよ、ちなみにいくつ？」

「先月で19歳、です……」

いや、身長俺の肩にも届いてないくらいなんだが……。

仮にこれが本当ならば超合法ロリ過ぎる。

……まあ、嘘だとは思うが。

「2×Sinπ/3は？」

「ルート3です？」

「まじでそれで19なのかよ、ロリ過ぎるだろ……」

「ろ、ロリじゃないですよ!？」

うん、どう見てもロリにしか見えない。

「まあ、良いや……それじゃあ、またな」

「あ、あのー!」

そう言っただけで去ろうとした時、俺は合法ロリに引き止められた。

「ん？ なんか用か？」

「え、えと……その、私、一人で……その、えと、ぱ、パーティを組んでくれませんか？」

「その容姿なら他にも色々声掛けてくれる奴もいるだろ？」

「どうしても言うなら考えてやるが、なんで俺だったんだ？」

何故か唐突にパーティの申し込みをされた。

普通、オンラインゲームでは容姿の可愛いプレイヤーには優しくしてくれる奴が多くいる。

こんなVRゲームならば尚更と言ってもいいだろう。

しかし、ここはデスゲームでありどう見ても貧弱で、初心者っぽい彼女に声は掛からなかったという事か？

「私、コミュ障なんです。

ちよつと話し掛けられたら普通はどもっちゃって、それに下心丸出しの人しか居なくて……

だから、思い切ってこの機会につて」

「あーそういう……」

さて、どうしようか？

今日は第二層の攻略を行う予定だしな……。

だが、彼女を放っておくのもあれだ。

もし、ソロでフィールドに出れば間違いなく死ぬ未来しか見えな
い。

……適当に1日だけ待ってもらおうことにするか。

「君みたいな可愛い娘に誘われたらそりゃあ嬉しいだが、生憎と俺は
これからちよつと用事があったてな」

「そ、そうですか……いきなりすみませんでした」

そう言っただけで彼女はガツクリと首を落とす、とぼとぼと歩いて宿の方へと帰ろうとする。

「あー、ちよつと待て。」

とりあえずフレンドにならないか？

今日は無理だが明日からという事なら行けるぞ？」

「い、良いんですかつ!？」

「お、おう……ほら、Okボタンでも押してフレンド登録しろよ」

「あの、私、ミオンです！」

これからよろしくお願いします」

「ミオンか……俺はシオン一字違いだな」

「えへへ、そうですね。」

もしかして似たような方多いんですかね？」

「アオン、イオン、エオン、ウオン、オオン、カオン、キオン、クオン、

ケオン……以外に全部居そうだな。

おっと、それじゃ俺はそろそろ行かなくちゃ行けないところがあるんだ」

「はい、ありがとうございます！」

今度は誰にもぶつからないようにして宿屋に駆け込み、速攻で着替えるとそのまま転移の広場へと全力で走り抜けた。

「うおー！」

「つ、捕まえろ！」

そう言っただけで俺を捕まえようとする解放者達を弾き飛ばし、転移可能エリアへと足を踏み入れた。

「転移！・二階層！」

こうして俺は二階層へと再び足を踏み入れた。

第二層

「よし、行くか」

第二層へと戻ってきた俺は速攻で東エリアに向かって走り出した。事前にWikiで調べた限りでは東エリアのボスはホワイトスノウスネーク、白雪蛇といったところか？

取り巻きはおらず、単身らしいのだが攻撃力がかなり高く高い防御力をもった装備を付けていないとほんの数発でHPが0になるらしい。

麻痺の視線、毒、素早い動き、高火力と4点揃って超いやらしいボスという事だ。

? α ?と β 、どちらも変態☆紳士さん含む精鋭96人のプレイヤーでぶつかつたらしいのだが、まともに戦えたのはその中でも10人くらいだったらしい。

現在の俺のレベルは11レベ、攻略を行うにはかなり低いレベルだと言えるが一切のダメージを受けない俺にはそんな事は些細な問題だ。

とりあえず殴って攻撃が当たってダメージが入れば勝てる。

ボスの経験値は10万、討伐報酬で貰える金は211万2000ガリン。

とりあえず今回は200万くらい貯金するつもりである。

第一層の転移の広場の買い上げを目指すぜって感じた。

一回1ガリンだけしか取らなかつたとしても最終的に何千人ものプレイヤーが移動してくれるようになればそれだけで大儲けになる。

総プレイヤー数は現在149万521人である。

あれからなんか減ってるなと思う。

開幕から掲示板で呼び掛けを行っていたり、東エリアの入口に門番

みたいな人もたっていたりするのも関わらず、忠告を無視して先に進んで死んでしまったプレイヤーが何人もいるのだ。

とは言ってもまだこれだけいるので、上の階層が攻略されて転移の回数が増えれば増えるほど収入が大きくなってくるのだ。

第二層の転移の広場はさつきちらつと見たのだが、2000万ガロンとどうやら階層×1000万ガロンするらしい。

上の層も買うのであれば五層刻みや十層刻みにするべきだろう。

第十階層の転移の広場は絶対に抑えておきたい。

ここには各ギルドの総本部と聖神教会の総本山である大聖堂があるらしく、始まりの町よりも多くのプレイヤーが訪れる事になる階層だ。

特に冒険者ギルドでは他の階層にある本部よりも様々な事ができる様になる。

その中でも最も重要なのがクランシステムだろう。

今この状態でもクランに似たようなギルドというものがあるのだが、それはあくまでも組合システムであり作成してもチャットとギルドバンクが使えるようになるだけで他のメリットは特に無い。

しかし、このクランシステムであればクラメン共通の倉庫やクランハウス、金のクラメン均等分配、経験値のクラン均等分配、クランアイテムなど様々な事が開放される。

それにクラン専用のイベントマップ等が？α？版では結構な頻度で開催された為に今回もそういったものがある可能性が高い。

そして、このクランシステムには24人までという人数制限があるのだが、あるクエストを最後までクリアするとその制限が解放されて何人でも参加する事ができるクランギルドという一般的に言うギルドの形になる。

このクランギルドの最大のメリットは大規模拠点システムだ。

？α？版の方でこのクランギルドを作成できたプレイヤーは海外

を含めて2億2000万人いる中でほんの100人足らずなのだが、聞く話ではNPCを自作できるらしい。

このスーパーな世界でもそんなNPCを自作できるとしたらどうだろうか？

間違いなく俺ならやるね。

何をとほ言わない。

だが絶対にやるね。

とまあこんな感じで第十階層は使われる事が多いのだ。

町の大きさも第一層の始まりの町より少し小さいくらいの大きさで、かなりの大きさがあるという事だ。

極東商会の支部もバリバリに作るつもりだし、俺もやる事が多そう
だ。

「えーと、ここが二層のボスエリアか……」

一層同様に、移動にはかなりの時間がかかったが、AGIが高く
なったおかげか前よりは短時間で到着できた。

大草原が広がる中にポツンと一つだけ大きな門があるとさすがに
目立つので直ぐに見つけることができた。

「シャアアアアッ!!!」

俺が門を開くと、巨大な蛇がどこからともなく現れて大きく声を上
げた。

大気を震わせる程の威嚇は普通の冒険者ならチビつても許される
レベルだ。

赤い瞳、白い鱗、凶悪そうな牙を携えて徐々にこちらへと近づいて
きた。

「相変わらずすげえ迫力だな……」

この程度で不死身の俺がビビる必要は無いので真つ向面から殴り掛かる。

HPバーは前回と同じく四本、なんでも北が一本、西が二本、南が三本で東が四本らしい。

HPバーの数と最大HPは比例する事はなく、HPバーが多いからなんだという話らしいのだが、%系のダメージを使う場合はHPバー1本を参照している為にかなり面倒臭いそうだ。

「白蛇さんよ、地獄に落ちる準備は良いか？」

「シャーッ！」

俺がそう声を掛けると、まるで新幹線の様な猛烈なスピードで突っ込んできた。

ただの真正面からの猛突進なのだが、この巨体ではそれすらも必殺の一撃になるのだろう。

「う、うおっ!？」

呆気なくその一撃に吹き飛ばされてしまい、俺は宙を舞うことになる。

食らった感覚としては生き物にぶつかっただと言うよりも、トラックか何かで轢かれたような感じのイメージだ。

轢かれたことないけども……。

「あつぶね、チビるところだったぞ」

軽業スキルを駆使して軽やかに着地すると、この猛突進をしてきた蛇の方へと向き直って構えをとった。

体格差があると投げ技が使えなくなるのでここは打撃を撃つしか

ない。

前回と同じく、ノックバック系の技だけを気にして、後はひたすらに殴り続けるだけでいい。

レベル差がある為、一発の攻撃ではバーの1%削れたかどうかというところなのだが、回復系スキルを持っている訳ではないみたいなのでそのうち殺せるはずだ。

「シャーツ!!」

「うおっ、そう言えば麻痺があるんだったな……」

蛇の目が紅く輝いたかと思うと、一気に俺の体が鈍くなった。

そして動かなくなったところにひと噛み。

丸呑みにされたらこれ、詰むんじゃないかなとか思ってしまったのだがどうやらそういう攻撃は無いようで毒を食らっただけで終わった。

麻痺も毒も俺にとっては些細な事だ。

麻痺は回復するのを待てばいいし、毒はHPが削られないので少し苦しい気がするだけだ。

この程度なら問題なく戦いを続ける事ができるだろう。

「おらよっよー」

隙をついて殴る。

ひたすらに殴る。

とにかく殴る。

麻痺をもう一度喰らわれないように、?α?で培った立ち回りを利用してひたすらに殴る。

普通なら16レベル96人で挑むのが基本の相手。

本来ならば単身で勝てるわけがないのだが生憎と俺は不死身。
どれだけ強い相手でもダメージがしっかりと通っているのだから
間違いない粘り勝ちできるのだ。

「必殺！ ただのパンチ連打！」

「フシャーっ！」

何の変哲もないパンチをひたすらに受けて、ホワイトスノースネークは地面に崩れ落ちた。

5時間ぐらいぶっ通しで戦い、何とか勝ちをもぎ取ったのだ。

「よっしやアアアアアア！」

俺が雄叫びをあげると、前の時と同じくシステムメッセージが流れ
てきた。

【ホワイトスノースネークを討伐しました！】

EXP+80000

レベルが上がりました！

レベルが上がりました！

レベルが上がりました！

レベルが上がりました！

レベルが上がりました！

EXP19010/24900

アイテム

【白蛇の鱗】×25

【白蛇の肉】×50

【白蛇の牙】×4

【白蛇の骨】×4

を獲得しました！

ラストアタックボーナス

【白蛇の魔眼】

を獲得しました！

お金

211万2000G^{ガレン}獲得しました。

エリアボスを討伐しました。

プレイヤー名を公開しますか？

ん？

なんかWikiには経験値10万って書いてた気がするんだが8万なのか……。

まあいいか。

「非公開で」

『第二層、東エリアのボスが討伐されました！』

ようやくこれで俺もレベル16。

やっと呪い系スキルの習得ができるぜ。

有名なナハトという殴り呪い師、そう言えばこれって『まじない』じゃなくてノロイって読むんだよな。

昨日Wiki見て初めて気がついた。

「えーと、所得するスキルは〜つと」

まず第1候補は接触系攻撃でダメージを受けた時に、相手にデバフを付ける【恨みの呪い】

一番最初に習得する事がオススメされているのだが、ダメージを喰らわない時でもこれ発動してくれるのだろうか？

俺は常時圏内にいるみたいなの感じなので機能してくれない可能性も十分にある。

第2候補は【呪われた体】というスキルで敵味方問わず触れた瞬間に『呪い小』を与えるというものだ。

こちらは上位スキルが2つあり、次は【怨念体】、最終的には【歩く厄災】というものになる。

スキル【歩く厄災】はかなり強いスキルらしいのだが、周囲にいる味方にも呪いを付与していくためにパーティがまともに組めなくなるボツチ専用スキルだ。

第3候補は呪い方向ではなく格闘スキルを強化するというもの。

柔術スキルや剛術スキルを獲得するのであれば【呪われ体質】はしばらくただの飾りになるが単純な火力は上がる。

「ん、とりあえず勿体ないし、さっさと【呪われた体】取っとくか……」

□□

『このゲームについて色々語るスレ』

【名無し】

もう二層クリアしやがったぞ。

【名無し】

自称解放者共が全員ブロックされてて掲示板だけはせめて使わせろって冒険者ギルドで抗議してたな。

自業自得だろ。

【しばぞう】

変態☆紳士グツジョブ。

【たかし】

あいつらホントPKされないかな……

【名無し】

めっちゃ恨まれてて草

【伝説の情報屋】

画像貼つとくわ（「・ω・」）「ホイ

『転移の広場に向かって走る極東の聖人』

【名無し】

まんま邪神教団の暗殺者じゃねえよ!?

【名無し】

速報、聖人は邪教崇拝者。

【黒の剣士】

この仮面の耐久力無限だからな。

装備壊されるの対策してるんだろ？

【名無し】

じゃあこのローブは？

これもなんかそういうアイテムなん？

【黒の剣士】

さすがにローブ・オブ・エターナルじゃないな。

まあ、あれは10層以降じゃないと手に入らんが。

【名無しの初心者】

その無駄にカツコイイ名前のローブはなんなんですか？

【名無し】

エターナルシリーズ。

ようは耐久力が無限な装備だな。

【名無しの初心者】

そんな装備があるんですね！

ありがとうございます。

【変態☆紳士】

東行ってるのにめちやくちや簡単に攻略してるよな。

俺も単身で南に突っ込みたいんだが。

【名無し】

もうすぐ96人で上の階層に上がるんやろ？

それくらいは待ってくれよ。

【変態☆紳士】

上に人が居るってのがなんか新鮮なんだよな。

速く追い越さねば……

【名無し】

間違はなく一人で独走してるし、もう放置でいいんじゃないかな？

向こうも俺らの援助なんて要らんみたいやし、変態☆紳士さん以外は邪魔にしかないんじゃない？

【名無し】

▽ 変態☆紳士

強迫観念に駆られてて草。

【変態☆紳士】

ならとりあえず不干渉っていうルールでも作るか？

考察したりするのはありだが、極東の聖人の邪魔をする事を全般禁止でいいか？

【黒の剣士】

いいんじゃないか？

明らかに迷惑掛けるくらいしかできないしな。

【変態☆紳士】

とりあえずルールに追加しておいた。

そろそろボス攻略の準備しとけよ？

しつかり寝て体調整えとけ。

一人の死者も出さずに上に登るぞ！

命の価値

デスゲーム開始からようやく一週間が経過した。

まだほんの二日くらいしか経ってないような気がするが、時間の流れというのは早いものだ。

第三階層では特にやることも無いのでレベルアップも何もせず第一層へと戻ったのだが、自称解放者（笑）達が未だに屯していた。

なんか言われたのだが、文明がそもそも違うのか意味が分からなかったので適当に投げと軽業スキルを使って超強引に突破した。

この迷惑さはガチで圏内PKも考えるレベルだ。

今日の予定はベッドで寝る。

一日中寝る。

……という訳にはいかずに、ミオンとパーティを組んでどこかのクエストをクリアしていくつもりだ。

俺、これまでクエスト系ガンスルーでボスだけ殴ってたからね。

『拝啓、ミオン様

物騒な命を懸けた世の中ですが、私は本日も変わらずに元気であります。

さて、昨日ミオン様は本ゲーム最強候補の一角である私にパーティの申し込みをされたかと思われるのですが、当方の予定が完了し、共にクエスト等を行える事をご報告致します。

ミオン様がレベル上げ等を行いたかったという場合、大変心苦しいのですが、最東のワニエリアにてレベル上げを行いますので命を駒にする覚悟が無ければクエストを共に行う事をオススメ致します。

本日の12時頃、中央区の喫茶店チヨリチヨリにてお待ちしておりますので、首を洗ってお待ちください』

送信つと。

後はいつものように喫茶店チヨリチヨリで優雅に紅茶を飲んで過
ごしていればいいだろう。

紅茶を飲みながら適当に周りを見てみると喫茶店チヨリチヨリも
買えることに気がついた。

というか基本なんでも買えるなこのゲーム。

喫茶店チヨリチヨリつて7000ガルン、だいたい700万円で購入
えるのか……これは買いたな、うん。

買いのボタンをプッシュ、今の俺の懐はボス討伐のおかげで超暖か
いのでこのくらいはらくらくである。

後は名前を極東商会喫茶店チヨリチヨリに変えておく。

7000ガルンのうちのくらいが回収できるかは分からないが、
結構流行っている店な事は間違いないしそれなりの儲けにはなりそ
うだ。

ピコン！

『メッセージを受診しました』

『from:ミオン』

ご連絡ありがとうございます。

偉大なるシオン様とこうしてパーティを組ませていただくことを
誇りに思います。

本日の12時頃、そちらへ向かわせていただきます。

こちらはクエストについては余り詳しくないため、ご指導ご鞭撻の
程よろしく願います。

つて、なんなんですかコレΣ(。ω。ノ)ノ』

「12まであと一時間もあつしWikiでも見ておくか……」

この一階層にはかなりのクエストが存在するらしいのだが、Wiki
iを見る限りではNPCが本当にこの世界で生きている為に、誰か一

人のプレイヤーがクリアしたらそれで終わりとかいうクエストが大
半らしい。

何度でも受けれるものは冒険者ギルドに貼られてあるクエストく
らいのもので、NPCから直接受けれるタイプのものはたまたま見つ
けるしか方法がないらしい。

とりあえずは始まりの町から出てどこかの村に行くのがいいのか
もしれない。

なんせ、始まりの町には現在130万人という数のプレイヤーが居
て、めばしいクエストは片っ端からクリアされていつている筈だ。

何故この町の外にも村や小さな町があるのに、こんなに人が集まっ
ているのかと言うと、この中央エリアの始まりの町以外は「聖神の加
護」の有効圏外だからである。

この聖神の加護が働いている空間であればあらゆる生命体は一切
のダメージを受ける事がなく、窃盗や住居侵入、強姦などなどの犯罪
行為も全くとっていいほど行えなくなる。

つまりはこの外に出てしまうと普通に人を殺せるし、ものを盗んだ
り、破壊したりもできるわけだ。

聖神の加護の中は倫理神の加護と秩序神の加護という2つに分け
られるのだが、この倫理神の加護はダメージの無効化とハラスメント
系の禁止をしてあり、秩序神の加護ではアイテムの盗難、破壊の禁止
や住居侵入の禁止を行っている。

これらが一切の効果を発揮しないのが圏外だ。

つまりはその気になれば簡単にやれる空間であり、プレイヤーでは
なくNPCに対してそういった行為を行うプレイヤーが問題になっ
ているらしい。

こういった犯罪行為をしたプレイヤーは違反した内容の加護が一
定時間働かなくなるといったペナルティがあるのだが、童貞を捨てれ
るなら死んでもいいというような潔のいいプレイヤーが一定数いる

為、やはりこうった行為が無くなることはないのだ。

違反の重さには軽度のイエロー、中度のオレンジ、重度のレッド、最重度のブラックの四段階が存在する。

イエローだとせいぜい3日違反内容の加護が効かなくなるくらい、オレンジだと2週間、レッドだと一ヶ月。

ブラックに達すると各ギルドで賞金首として指名手配され、圏内に今後立ち入る事が不可能になるらしい。

こういうプレイヤーが来た村を探し、クエストを受けて村人達の前に引きずり出す。

これが恐らく一番速い筈だ。

基本的にこういったプレイヤーは弱い所にしか現れない為、行くのは北である。

フィールドに点在する村を片っ端から尋ねていけばそのうちヒットする筈だと思う。

「問題は俺がプレイヤーをやれるかどうかだな……」

敵モブは人型であっても躊躇なく殺せるのだが、プレイヤーとなると少し話は違う。

いくらここが殺伐としたデスゲームとは言ってもリアルの人を殺すのには多少の抵抗感がある。

「あの、し、シオンさんですか?」

「ん? ああミオンか、今日はよろしくな」

色々と考えながらWikiを見てみると、ミオンがやってきた。

時間を見るともう12時になっており時間ピッタリだ。

「は、はい、それでどこに行くんですか？」

「とりあえずは1番弱い北だな、そう言えばレベルいくつ？」

「ま、まだ1です……」

「なら経験値吸うといけないしとりあえずパーティ化は無しでいいか？」

レベル差があると俺の方に経験値が流れてくるし、しかも俺のレベルは北のボブじゃ殆ど上がらんからな」

「だ、大丈夫です」

「ついでに他のプレイヤーを殺す覚悟はあるか？」

「ほ、他のプレイヤーを、ですか!？」

あ、やべえなんか言い方を間違えた気がする。

これじゃあ俺がPKに誘ってるみたいだ。

「ああ、犯罪行為を行っているプレイヤーのHPを0にする事はできるか？」

「ば、場合によると思います」

「ならこの世界のNPCを殺す事はできるか？」

「それならできると思います」

「その違いはなんだ？ 同じ地球から来たからか？ それともNPCなら命は無いから殺しても大丈夫なんて甘い考えを持つてるのか？」

「ふ、ふえ？ え、えと……えと、リアルに帰った時に責任を求められる可能性があるからでしょうか？」

「なるほどな……」

ふむふむ、俺も言われてみればそうかもしれない。

が、何故リアルの事を気にする必要性があるのかということに気がついた。

今この瞬間を生きれない者に明日を考える資格はないと思うのだ。

「つまりお前は100階層の全てのボスが攻略されて、邪神と戦うそ

の瞬間まで自分だけは絶対に死なないなんて甘い考えをしているのか?」

「え、えと」

「ここは平和な日本じゃあない。」

ふとした事で死ぬかもしれない命のやり取りを行う殺伐とした世界、ファンターシエだ。

明日も自分が生きているなんて甘い考えは捨てた方がいい。

そして今日を生き、明日へと繋げる為には金と経験値は絶対に必要なわけだ。

今はまだ大丈夫なのかもしれないが、このゲームの初期の手持ちは20ガルンしかない。そのうち絶対に金が必要になって金を稼ぐためには力がある。そして力を得るためには経験値が必要だ。経験値を得る為にはもちろん自分の命を駒にして圏外へと出なければならぬ。

そしてゲームの供給するリソース、つまりは金や経験値には限りがある。ということはお前が生きる為には誰かの分の金や経験値を必然的に奪うと言うことでもある。

お前に他者を殺してまで生きる勇気と資格はあるか?」

「……」

答えは沈黙。

そりゃあいきなりこんなシリアスな話をされたら困ると思う。

だが、これは俺の俺に対する問でもある。

自分の為に他者を虐げ、殺す。

これができるようであれば俺の生きる価値はない。

「あります」

「本当によく考えて出した結論か?」

「これはゲームじゃないんだぞ?」

「正直な所、まだそんな実感はないです」

「なら、その場の雰囲気流されて自分の頭で考える事を辞めて、俺に

ついでこようとしているのか？」

「でも、死にたくはないです。」

そのために犯罪者を、悪人を殺して、その結果まともに生きる人が少しでも多く、命の椅子に座れるというのなら………が、頑張ってみます」

「さすがだロリっ娘、よく言った」

「ろ、ロリじゃないですよー！」

これはただのゲームじゃない。

世界ファンターシエという一つの世界で送る命と命の物語。

だからこそこのゲームを俺は美しいと感じるし、面白いと感じるのだ。

腐ったように親に甘えて、だらだらと呑気に過ごしていた地球と比べて自分の力で生きているという実感がはつきりとある。

デスゲームという形で地球には帰れなくなっってはしまったが、生きるという事の意味に気が付かせてくれたこのゲームとこのゲームを作った神変態を俺は恨んでは居ない。

俺だけではなく、多くのプレイヤーがそうなのかもしれない。

かなりショックや恐怖を受けた人も中にはいるだろうが、そういったスレがほんの2、3件しか作られていないのをみると俺は思うのだ。

命の危険に晒されることも無く、生きてきた日本人にはこれは良い薬だと。

「よし、それじゃあそろそろ行くか」

「はい、お願いします」

俺はミオンと共に外の世界へと足を踏み出した。

その一歩が何か大きな第一歩に感じて、俺の心の中のモヤモヤの塊がスツキリとどこかに飛んで行った。

待たせたな世界。

待たせたな俺の人生。

ここからが俺による、俺のための物語の始まりだ。

ミオン①

始まりの町から出た後、適当に北の村を目指して歩いているといい感じのゴブリンに出くわした。

レベルは1、同じレベルのミオンの相手にはもってこいの相手だ。

「お、いい感じにゴブリンがいるな……とりあえず殴って見たらどうだ？」

「は、はい。『大いなる水よ、水球を綴りて敵を撃て』」

この厨二チックなワードを言うことで発動するのがこの世界の魔法システムだ。

かなり上級になってくると自分のオリジナルの魔法を作成したり、無詠唱や詠唱破棄といったことも出来るのだがまだレベル1では簡単な魔術程度しかできない。

しかし、普通の物理攻撃よりは火力は高く相手が物理系の攻撃を使う敵であればかなりの有効打になる。

「ギギャッ！」

「わ、わ！ こ、こっち来ないで下さい！」

ゴブリンに水弾が当たると、ゴブリンのHPが2割ほど削れる。

ゴブリンも痛かったのか棍棒を振り上げて怒りを露わにしてミオンの方へと向かっていく。

「とりあえず走りながら詠唱しろ、魔法使い系のプレイスタイルはいいかに息を切らさずに魔法を詠唱するかだ」

「は、はい！ 『大いなる水よ、水球を綴りて敵を撃て！』」

「グギャッ！」

走りながらミオンがもう一度詠唱を行うのだが、ゴブリンがさらに

怒ったくらいでHPはまだ6割近くも残っている。

うん、ロリっ子がゴブリンに追いかけて回されているようにしか見えない。

「はあ、はあ、『お、大いなる、水よ、水球を、綴りて、敵を撃て』、あれ?」

「詠唱を途切れさせるな、なるべく一息に詠唱しろ」

「グギャア!」

『『大いなる水よ、水球を綴りて敵を撃て』』

ゴブリンを相手に何をやっているんだと思うかもしれないが、レベル1のプレイヤーのソロ狩りは普通こんなものだ。

走り回り、なるべく攻撃を避けてのヒットアンドアウェイで無様に逃げ回るのが一番勝率が高いのだ。

たとえレベル1であろうとも絶対に雑魚キャラでは無いのだ。

そもそも、敵キャラが簡単に倒せるのであれば何故冒険者ギルドに依頼が出るのか?

そういう間に神変態が出した答えがこれだ。

『簡単には倒せないから』

このゲームではたとえばゴブリンやスライムといった一般的には雑魚キャラとされているような敵でも死ぬ可能性がある敵として登場する。

だから冒険者という職業には需要があるし、憧れとロマンがあるのだ。

「お、大いなる水、きやつ!」

アドバイスだけして後ろから傍観していると、ミオンは足を取られて転んでしまった。

軽業スキルを習得していないとプレイヤーは時々転ぶ。

この使用はα版と同じだが、デスゲームで転けるのは絶望感が半端ないだろう。

「ギャギャキャー！」

「ハイハイそこまで、ちよいさー！」

ゴブリンが棍棒を振り下ろそうとした所で、俺が介入し、背負い投げで地面に叩きつけて倒れた所に拳で仕留めた。

パーティを組まずに1つのモブを倒した場合には経験値は貢献ポイントが高い順に割り振られ、アイテムは倒した方が総取りとなる。

今回はミオンにEXPが7振り分けられたみたいだ。

「はう、ご、ゴブリンに負けました……」

「あれだと転ばなければ転ばなければ勝ってたな。

まあ、こんな感じでレベルを1つ上げるのもソロだとキツいつて事が分かったか？」

「はい……パーティの大切さがよく分かりました」

このゲームは6人パーティを組むだけでかなり変わるからな。

リアリティがあるとえばよく聞こえるのだが、ソロプレイヤーにはたまったもんじゃない。

ちなみにプレイヤースキルがかなりものをいい、VR版でもα版でも最高のプレイヤースキルを誇る変態☆紳士さんはイベントが来た時に初期装備1レベルのまんまで一階層の全てのボスを倒すなんて事をやってのけたりもしている。

VRになったβ版以降ではさらに鬼のような強さを発揮したらしく、今の俺がやっているみたいに単身で上層に進み続けていたらしい。

「ああ、そう言えばMP回復ポーションはどのくらいある？」

「な、ないです……」

「よし、とりあえずこれ持つとけ」

システムから取引の画面を呼び出してマネポジションを80個貸出する。

この貸出システムは返却期限や利子、担保、といったものを自由に設定できるのだが今回は返却期限三ヶ月、利子無し、担保はキャラクターとして入力しておく。

担保キャラクター、α版の方では担保にキャラクターを選択するよ
うな事はできなかったのだがこれ、違反するとどうなるのだろうか？

Wikiにもまだ情報は出ていないし、一度試してみたいものだ。
無担保のままでもできるのだが、α版の時と同じならば無担保で
破った場合にはイエローになり、取引システムが一ヶ月使えなくなる
そうだ。

「ま、マネポジション80個……た、確か今は1つ3ガルンですよ
ね？」

「ああ、まあ日本円で24万円くらいだな」

「もしかして、本当に凄い人です？」

「たかだかマネポジション80個だ、別にそんな凄いものじゃないな」

いや、どうなんだろう？

他のプレイヤーがどのくらい稼いでるかとか分からないからな
……。

でももうそろそろ一週間だし、240ガルン程度ならそここのプ
レイヤーならば稼げない額では無いはずだ。

俺とかもう何百万ガルンか稼いでるしな。

「え、えーと……この担保のキャラクターというのはなんなんですか
？」

「まだWikiにも情報が出てないから俺にも分からんが、一応ちゃんと返せよって意味で付けておいた」

「か、返せるでしょうか……」

「まあ、何とかなるんじゃないかね？」

「とりあえず村目指すぞ」

ここから一番近い村までの距離はだいたい5キロメートル程先にあるらしい。

相変わらずマップが広くてやばい。

□□

「あ、あの……あそこで誰か戦ってませんか？」

「ん？ よく見つけたな」

しばらく黙々と進んでいると唐突にミオンに声を掛けられた。どうやら誰かが戦っているらしい。

「えーと……あれは多分PVPだな」

目を凝らして見てみると、人と人が戦っていた。

片方は短剣二本持ちのレンジャーの少女に剣士の少年と神官少女、弓使いの少年とまるでお手本のようなパーティだ。

もう片方は全員が盾持ちの片手剣使いで12人もいる。

「え、えと……も、もしかして、襲われているのですか？」

「ほいな、もしお前が一人ならどうする？」

「見捨てます」

おう……日本人とは思えないドライさだな。

あれ？ 日本人だっけ？

ミオンの選んだのはかなりの薄情な選択だが、非常に正しい選択だ。

自分の強さに相当な自信があるのならともかく、一人が加勢してもそんなに形成が変わることは無い。

無駄死にする奴が一人増えるだけだ。

「かなり薄情かもしれないが、いい選択だ」

「あの、でも……助けられるなら助けてあげたいです」

「じゃあ今ならどうする？」

「たった2人で加勢しても人数は2倍もあります。

シオンさんが私の予想以上に強くなければ厳しいと思います」

「じゃあ正解を教えてやるよ、答えはこうだ」

俺はミオンの頭を撫でると全力で戦っているプレイヤーの方へと走り出した。

あ、ミオンにデバフ入ってる……まあいいか。

「そのこの4人組、助けはいるか？」

「お礼はします！ 加勢頼みます！」

「はっ、命知らずの兄ちゃんだなあ？」

一匹増えた所でそっちは五匹、こっちは12勝てるわきやねえだろ？」

「さてさて、地獄に堕ちる準備はいいか？」

「お、お兄さん、失礼だけどレベルは!？」

「内緒だよっと！」

実は今にも震え出しそうな足に気合いを送り込み、プレイヤー狩りをしている奴らに向かって突撃していった。

まずは一人！

「育神流合気柔術、奥義、【不可説転】！」
「うおっ!？」

適当に今作った謎流派と数の名前を付けただけの謎奥義でちぎっては投げてちぎって投げてを繰り返す。

相手に触れるだけでデバフが付き、動きが少し鈍くなりその度に戦闘がやりやすくなる。

「な、なんだコイツ!？」

「きよ、距離を取れ! 触れた瞬間に倒されるぞ!」

「無駄だ、育神流合気柔術を極めた俺から逃れる事等できぬわあッ!」

距離を取ろうとしてもレベル差の暴力で正直どうともなる。

装備はまだ整えてないのでそんなに差はないが、こっちのAGIは装備補正を含めて53であり一層のプレイヤーとは文字通りレベルが違う。

「成☆敗!」

「ぐわあああつ!」

「お、おかしらあああつ!」

「悪かったな、レベルが違いすぎた」

AGIだけでは無い、STRもDEXも格が違う。

これがレベル差の暴力。

ついでに俺のHPは0であり、どんな攻撃も効かないチートスペックを誇っている。

今の俺と対等に戦えるのはせいぜいがあの変態☆紳士さんくらいのもので、他のプレイヤーに負ける気はなかった。

「ふう……スカッとした」

うん、人を殺せるかとかクソ真面目に考えていたあの頃の俺がバカみたいだ。

殺した後もむしろ悪者を退治してスカツとしたくらいである。

これ俺、明らかなサイコパスじゃねえか……。

「す、すげえ……」

「育神流合気柔術……武術の達人がVRMMOするところなるんだな」

「ありがとうございます!」

「いくしん? え、えと、なんだっけ?」

「ふ、この俺の育神流合気柔術にかかれば容易いものだ。」

礼は俺じゃなくてあの子にしろよ、あの小さな子がお前らの事を助けたって言ったんだぜ?」

「はあ、はあ、や、やっと追いつけました」

思いつきり痛いやつだと思われると思っていたのだが、結構高評価だったようだ。

実際にはそんな流派があるわけもなく、リアルの俺はただの廃ゲーマーなのだが。

とりあえずようやく追い付いてきたミオンに全部擦り付けておく。

「お嬢ちゃん、俺はレンだ。」

助けてくれてありがな」

「えーと、私はルアって言います。」

人助けできるなんて偉いね」

「俺はフォースハルト、まあ適当にハルトとでも呼んでくれ。」

「この恩はいつか必ず返すからな!」

「わ、私はカオリです。ありがとうございます!」

俺が擦り付けると、戦いでボロボロになっている4人はミオンにそれぞれお礼を言った。

頭撫でたりされてるし、お嬢ちゃんとか呼ばれてるしもう完全な幼女扱いだな。

「ふえ？ えと、え？ し、シオンさん!？」

「幼女よ、こういう時は感謝は受け取っとくもんだぞ」

「よ、幼女じゃないですよ!？」

「分かってる分かっている、直ぐに大きくなれるからな」

「な、なりませんよ！ 成長もう止まってるんですよ！」

それにVRゲーム内だしな。

これで成長までしたら一体どれだけ作り込んでるんだよって話だ。

……有り得そうな気がする。

NPCもAIとかそういうレベルじゃなかったし、子作りや子育てまでできそうな気がする。

「おっと、俺はシオン一応20歳で大学生だ。

こっちはシオン、10歳の小学生って所だ」

「ち、違いますよ！ 小学生じゃないです！」

「よしよし、いい子いい子」

からかい過ぎてミオンがちよつと涙目になって来ているがこれはこれで可愛いので頭を撫でておく。

あ、呪いついた……これオフにできないのってかなりめんどうきいな。

「えーと、お2人は兄妹ですか？」

「あー、腹違いの兄妹だな。 家庭のじ……」

次々に設定を適当に作って行こうかなと思って話していたらミオンからのガチのストンプがかかった。

うん、ふざけすぎた。

「か、勝手に設定を捏造しないでください!!」

兄弟でもないですし、私はこれでも19です!」

「ほらミオンちゃん、お兄さんが話してるからちよつと離れた所で私と遊んでよっか?」

そんなミオンの言い分を全く信じない短剣の少女。

俺もわかるわ、この見た目じゃガチで信じられねえよな。

「ふええ。ほ、ほんとうに19なんですよお……」

パーティー

俺は地面の上で正座をさせられていた。

何故かって？

そりゃあミオンを弄りすぎたせいだ。

「というわけで俺のミオンに関する発言は全て嘘でミオンは19歳の成人、つまりは合法ロリ全ロリコンの夢というわけだ」

「そうです、私はこれでも成人なんです」

「でも信じられねえよな、どこからどう見ても……おつと」

ミオンが全力で眼力を込めて睨みつけると、剣士の少年はそこから先を言うのを辞めた。

うん、いい判断だ。

睨まれてもジト目が可愛いだけなのだが。

しばらくは小さいとかロリとか幼女とか全部禁句だなこれは……。

「えー、うおっほん。改めてじゃあこっちも自己紹介を。

まず俺が剣士役件、盾役件、パーティーリーダーのレンです。

リアルでは高校二年生で趣味はネットゲって感じです」

黒髪黒目のイケメン剣士、恐らくリアルからそのまま持ってきたんだろうって感じがバリバリする日本人顔だ。

装備は初期装備を店売りの剣に変えて盾を付けた感じで、この序盤ではありふれたスタイルだ。

絶対にもてるなこいつ。

「俺はフォースハルト、レンと同じ高校の一年生で後衛を担当してます。

趣味はネットゲと料理と読書、弓道部所属で使い慣れてるからVR版では弓使いを選択しました」

もう1人の方は金髪の男で、キャラメイクかα版の方から取ってきたのだろう。

弓道部だからといって弓を使う必要はないのだが、慣れている分だけプレイヤースキルが高くなりやすい。

「私はルアって言います。」

このパーティのシーフになる予定ですが、今はただの短剣使いです。

同じ高校の二年生で、趣味はネットゲ？」

ミオンに話してた短剣の少女。

背は低い方なのだが、ミオンよりは当然高い。

黒髪黒目で、日本人顔なのでこちらもリアルから持ってきた可能性が高い。

容姿はそれなりに整っている方で、可愛らしい系の少女だ。

「か、カオリです。 同じ高校の一年生で、趣味はゲームです」

最後のは簡潔な自己紹介。

銀髪のロングと緑色の瞳をしたプリーストの少女で、パーティの回復役を務めている。

こっちは可愛いと言うよりも綺麗という言葉が似合う感じの少女だ。

若いとは思っていたが全員同じ高校のメンバーか……それも男女のペア2つ。

間違いなくリアルは充実してる系だな。

「魔法使いのミオンです」

「さつきも言ったが俺はシオン、育神流合気柔術の師範、というのは嘘

でただのゲーマーだな」

「お兄さんほんとにただのゲーマーなの？」

「さっきの凄かったよ?」

「まあ、それなりに強いゲーマーってところか?」

「ほほほーんっ」

『第一層、南エリアのボスが討伐されました！』

討伐したパーティは「変態☆紳士と愉快な仲間たち」、「北風と南風」、「殴り呪い師連合」、「しばぞう特攻隊」、「絶剣」、「解放者達をぶっ飛ばし隊」、「邪神教異端審問会」、「聖神教を広めようの会」、「アサバコーポレーション」、「ソピアちゃんをペろペろし隊」、「貧乳万歳」、「伝説の情報屋の伝説」、「肉体言語研究会」、「魔術師ギルドを作ろう会」、「魔術師ギルドを作ろう会つー」、「たぴおかみるくてい」以上の16パーティです』

あれ? 南エリアの攻略って明日じゃなかったけ?

というかパーティの名前酷いのがいくつかあるんだが……。

解放者達をぶっ飛ばし隊はさっきとあいつらを吹っ飛ばしてくれ
ると助かる。

「あれれ? パーティ名って放送されない仕様になったんじゃないの?」

「あ、本当ですね。 東の人は放送されてなかったですよ」

「確か東の聖人ってソロなんだろう?」

「ならパーティだけが表示される仕様なんじゃないか?」

「ん? βの時だと変態さんが单身クリアした時にも放送されたって聞いたぞ」

レイドならパーティ選べないとかそういう事もないだろうし、Wi
kiにも確か選べるって書いてあった気がする。

「あれは放送するかどうかってというのは選べるんだぞ?」

「さすがお兄さん、詳しいね」

「そういえば、極東の聖人さんってどんな人なんでしょうか？」

「普通にβテスターじゃないのか？」

「未経験であるのスピードは無理だろ」

「βテスターじゃないみたいですよ」

「え？ βテスターじゃないのかよ」

「情報屋の人がβテスター全員に聞いて回ったらしくて、βテスターじゃないみたいですよ」

「いや、よく何処にいるかも分からない1000人を訪ねて回つれたな……」

「βテスターじゃないならどんな人なんでしょうか？」

「お兄さん知ってたしない？」

「……」

うん、どう答えようか。

無難にはぐらかしても良いのだが、NPC考察でも投げてみるか。

「恐らくだが、ゲームマスターの神変態本人による演出だと思うな。」

ほら、最近アニメやってた某デスゲームものでも一番強いプレイヤーがゲームマスターだったろ？」

「えと、自分で作ったゲームを自分で攻略するんですか？」

「んー、ミオンも横で人がやってるゲームを見てるだけってめっちゃやりたくなくなってくるだろ？」

それにこのクオリティだからな、自分でもやらなければ明らかに損だろうよ」

「確かにそういう考察もあるよね。」

でもそれなら商会とか作らないと思うし、解放者達に困ったりもしないんじゃないかな？」

おお、賢い。

これに対する反論とか無いんだよな。

適当に答えてみるか。

「……それも自分はプレイヤーですよっていう演出かもしれないだろう？

大多数の人がプレイヤーだと信じた時に『実はおいらが極東の聖人だよ！』とか言ってラスボスとしてプレイヤー達を待ち受ける可能性も十分にある。

可能性は無限だから考えても仕方がないんだが、色々と考察するのって楽しいよな」

「そうだよな、情報も仮面とローブを身にまとった拳闘士って事しか分かってないし」

「あれ、拳闘士なのか？ そんな情報あったか？」

「あ、レン！ せっかくカマかけてみようとしたのに……」

うおお、あつぶねえ。

俺が疑われてたのか……全然気が付かなかった。

ありがとうレン、お前の事は忘れないぜ。

この隙にさっさと話をすげ替えるか。

「ああ、そうだお前ら魔法使いを一人パーティに入れるつもりは無いか？」

「え？ もしかしてミオンさんのことですか？」

「見たところ外に出たばかりでありつらに狙われたって感じだろ？」

レベル帯も近いだろうし、明らかにレベル差がある俺と組んでいるよりは良いと思ってな」

「魔法の担当がいないので大歓迎ですが、シオンさんはどうされるんです？」

「んー、レベル差があるし……俺はコーチ役かな？」

俺が参戦したらHPバーが減らないのバレるかもしれないしな。

とりあえず謎のゲーマーって感じで立ち回るところか。

育神流合気柔術の達人とかいう意味不明な設定よりはいいと思う。

「おお、コーチ役ですか。実際に体動かすゲームとか全然やらないですし、戦術とかも今は全く考えて無いんで助かります。

ミオンさんも、これからよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

「うし、とりあえずフレンド申請全員に送ったから登録してくれ。

HPバー見るために、俺もパーティには加入しとくが設定で経験値分配を切り分けてくれ」

「すいません、経験値分配設定ってどうやって切り分けるんですか?」

「α版と同じならパーティ、詳細設定、アイテム分配、経験値、個別設定で行けるはずだ」

少し教えてやると、できたみたいで6人パーティのできあがりだ。

パーティ名は『悲しみの向こう側』一体お前らに何があつたんだ!?

「あ、あの……パーティ名変えませんか?」

私、あのアニメ好きじゃなくて」

「えー、ダメなの?」

「お前のネーミングかよ……」

「こいつはそういうの好きなんですよね、この際ですから新しいのにしときましようか?」

「まあ、とりあえずはこのままでいいだろ。

落ち着ける場所でゆっくりと考えればいいだろ」

「あの、レン君、MPも心許ないし一旦町まで帰らない、かな?」

「あくそうだな、俺も武器ヤバイし……シオンさん達もそれで良いです?」

「それで別にいいが、というかパーティなんだから敬語は無しにしないか?」

敬語は距離を開けるからな。

パーティで仲良くやっていくのなら敬語はやめておいた方がいいだろう。

「そうだよな、敬語とかいららないよね」

「ルアちゃんは敬語が苦手なだけじゃ……」

「あれ、バレてる?」

「とりあえず町まで戻るなら速く戻ろうか、時間は有限だしな」

□□

とりあえず全員で一旦宿に戻って三時に再集合という事にしたのだが、全員が全員とも極東商会の宿に泊まっているらしい。

かなり値段安く設定してるし、そりゃあ使えるものは使うか。

「なんか凄い人ですね」

「んー、極東の聖人の時も凄かったしこんな感じ普通じゃないかな?」

「これ、かなり迷惑だよな」

「転移可能な場所がここしか無いから仕方が無いといえれば仕方がないんだがな」

「おい、帰ってきたぞ!!!」

人混みの中を宿に向かって歩いているとざわめきが大きくなり、何人かのプレイヤーが大きく声を上げた。

英雄の帰還である。

「俺はどこにでもいる変態、ただちよつと強くて雄々しいだけの変態だ。」

遅漏おそくてすまんなお前ら!!!」

「「うおおおおおっ!」」

変態☆紳士が拡声の魔石を使ってそう叫ぶと、大量の歓声が上がった。

ここからではあまりよく見えないが、先頭を歩いているのは男三人、女二人、オカマ一人のパーティ『変態☆紳士と愉快的仲間たち』だ。今回は剣士1、槍1、盾1、魔法使い2、神官1のパーティみたいだ。

「やつぱり居ないか……」

俺の妹、【大聖堂】の2つ名を持つ神官の姿は見当たらなかった。

変態☆紳士と愉快的仲間たちにはいないということは本格的にアイツはこの世界には来ていないのだろう。

「お兄さん、誰がいなかったの？」

「……大聖堂ユースだな、α版の方とパーティメンバー違うだろう？」

「ああ、そう言えば別人ですね」

「あれ？ ミオンどこに行った？」

ふと気がつくと、人混みに飲まれたのかミオンがいなくなっていた。

しかも、小さいせいでどこにいるか全くわからん。

「おい、カオリもいないぞ」

「あれ？ カオリもはぐれたのか」

「ほんとだ、手分けして探そっか？」

「いや、それだとさらにはぐれるだろ。」

とりあえずメッセージ送って3時半までには喫茶店チョリチョリに集まるように送ったから俺らは固まって動くぞ」

上位プレイヤー

「おいクソガキ共、てめえら人にぶつかつといてそれですまそうつて
のか、あー！」

「ふ、ふええ!?!」

「こ、この人混みじゃ、不可抗力です！」

そ、それにそちらにも非があると思います」

「上等だ、クソガキ！」

俺たちが2人を見つけると、堂々と町中で敵つい顔の男に絡まれて
いた。

どこの世界にもこういういかにもモブそうなチンピラはいるもの
だ。

なんか騒ぎになってたおかげで直ぐに見つかった。

「はいはい、ストップ」

「なんだあてめえ?」

「そいつらの保護者件、パーティメンバーだ。」

文句があるなら代表して俺が聞くが?」

「ほう? なら賠償として500ガルン払え」

うん、何言ってるんだこいつ。

まあ、聞くだけ聞いたし帰るか。

「よし、じゃあお前ら帰るぞ」

「おい! てめえ! 待ちやがれ!」

「俺は聞くと言った、そしてお前は言い分を言った、だが俺は当然
それを叶える義務はない」

「そんな屁理屈が通じると思ってるのか!」

「思ってるが?」

「決闘だ、俺とデュエルしろ」

「いいぜ？」

「ちよ、やばいですよ！ こいつ二つ名持ちです」

二つ名持ち？

こいつが？

どう見てもただのチンピラにしか見えない。

『チンピラ』の二つ名でも持ってるのか？

まあ、別に二つ名持ちだろうが構わん」

「よく言ったなクソガキ、じゃあさっさと武器を出せ」

「武器？ そんなもんないな。」

お前なんぞこれで十分だ」

そう言っつて俺は拳を構える。

相手がどんなプレイスタイルだろうがHP0の俺には関係ないし、
そもそもレベル差の暴力がある。

余程のプレイヤーでなければかすり傷負わずに倒せる自信はある。

「ぶざけるんじゃねえッ！ それじゃあ一瞬で勝負がついちまうじゃ
ねえか！

勝負はお預けだ、二日後の正午にここに来い！

その時も持ってなかったら容赦しねえからな」

そのまま決闘に移る流れかと思ったのだが、何を思ったのかそのま
まどこかに消えていった。

よく分からんが、とりあえず明後日の正午にここに来れば良いみた
いだ。

まあ、いいか。

どうやらあれでも二つ名持ちみたいだし、対人戦の訓練にはなるだ
ろう。

HPが0なのがバレると問題の種なのでどんな奴が相手でも攻撃を喰らわないようにならないとな。

「よし、帰るか」

「け、決闘を挑まれたのに冷静ですね」

「勝てば問題は無いだろう？」

「そ、そりゃあそうですけど……」

「こんにちは、ちよつといいですか？」

「ん？」

声を掛けられたので振り返るといかにもな拳闘士スタイルの女性のがそこにいた。

先程、転移の広場から出てきたプレイヤーの一人。

殴り呪い師連合のリーダーにしてプレイヤーランキング6位、『超怨念』のナハト。

辺りに呪いのデバフをばら撒きまくり、弱体化した敵を投げ技と組技を使って封殺する殴り呪い師の原点だ。

「あ、確か、怨念のお姉さんだ！」

「すげえ、本物だ」

「あの人は『蛮族』の二つ名を持つてるそれなりに強いプレイヤーなんですけど本当に良かったのですか？」

「勝てば良い、そうじゃないか？」

「君、私と同じスタイルですよ？ 序盤は相性がかなり悪いよ」

「……どうやって見抜いた？」

「さっきのセリフからか？」

「それともまさかこんな序盤で高レベルの看破持ちがいるのか？」

「あ、鑑定は警戒しなくてもいいよ。ユニークスキルの『千変万呪』の効果ですから」

「ゆ、ユニークスキル!？」

なんだそのチートポイもの。

どうやって手に入れるんだよそんなもん。

千変万呪、名前を聞く限りでは呪いの効果を変化させるとかそういう能力か？

それとも呪い系の複合スキルか？

……仮に複合ならくっそ強くね？

「ユニークスキルとかあるんだな……」

「今回のゲームが始まった時にα版でランキング12位までにいたプレイヤーに与えられたみたいだよ」

「マジかよ、チートじゃねえか」

「確かにチートかな？ とは思ってますが使えるものは使いますよ。

こんなデスゲームなら尚更ですよ」

そりゃあ、ランキング上位勢がVR版でも強いわけだ。

あの変態☆紳士はαもβもプレイヤースキルが鬼やばかったらしいのでユニークスキルとかいらないうと思う。

鬼に金棒、いや変態にパンツだ。

「確かにな、使えるものは使うべきだ。

で、本題は？ ただ心配しただけじゃないんだろ？」

「そうそう、もし良ければギルドに入らないですか？」

「ギルド？ えーと、呪いギルド？」

「えーと、そっちじゃなくて『変態☆紳士と愉快なせかわ攻略軍』の方ですね。」

君、そうとう強いと思ったから誘ってるんですけど、もし良ければどうですか?..」

そう言えばなんかギルド作るとか掲示板に書き込んでた気がする

んだが『変態☆紳士と愉快なせかわ攻略軍』って言うのか……相変わらず名前が酷いな。

というか、そっちじゃなくてって事は呪いギルドもあるのか……。

「必要性ができたら参加させてもらう」

「そうですか……ありがとうございます」

俺が断ると、とぼとぼと帰っていった。

あ、なんか落ち込んでるの可愛い。

「さて、これからパーティを組むことになったわけだがまずは役割を決めようか」

喫茶店チョリチョリでホワイトボードを取り出した俺はそこに色々と書き込んでいく。

「まず前衛はタンカーのレンとアタッカーのルア、中衛は魔法攻撃のミオン、後衛はヒーラーのカオリと長距離攻撃のハルト、これに異論は無いな？」

「ミオンさんは中衛なんですか？」

「ああ、長距離系でキャラメイクをしない限りは魔法使いは基本中衛だと思ってくれ。」

「んで、俺は指揮官役だとも思ってる」

そうやって俺は一番後方に指揮官と書き込んだ。

次に書き込むのはメイン役職以外の役割だ。

「レンが俺が居ない時の代理指揮官、ルアが斥候、ミオンが地図、カオ

りは情報、ハルトがチャッターで異論はあるか？」

「えーと、Wikiとチャッターって？」

「Wikiは情報収集役、つまりは敵モブの情報を調べたりする役割でチャッターは外部とのやり取りを行ったり、いざと言う時に連絡を行ったりする役割だ」

綺麗にこうやって役職を割り当てておくことで1つの事に専念できる為、効率が非常に高くなるのだ。

ついでに全員が『誰かがやってくれるだろう』と考えて誰もやっていない事態というものを防ぐことができる。

意外とこういうケースが多いのだ。

「シオンさん、チャッターって日頃は何をすればいいんだ？」

「何もやる時がなければWiki役をサポートだな、掲示板でも見て情報を集めるといいぞ」

「なるほど」

「以上、具体的な戦術についてはその場で言う事にするからとりあえず南に行くぞ」

「南ですか？」

「ああ、北も西もプレイヤーが多いが南と東は敵が強いからさほど多いわけじゃない。

そして南は東より敵が弱い、つまりはレベラゲにはもってこいの場所なんだよ」

東は低レベル帯でも出てくるのがレベル4だからな。

このパーティなら頑張れば勝てるとは思いますがそれでも負ける可能性が残り、効率が悪くなるので南をチョイスしたという訳だ。

□□

南エリアはちよつとした草原になつて場所が多く、開けていて戦

いやすい。

出てくるのは動物系のモブで、代表的なのはブルーブルという牛だ。

「ブビィィィ！」

この牛、モーではなく豚のようにブビィと鳴く。

よくあるファンタジーの謎設定だな。

ブルーブルはこちらを見つけたら、即座にレンに向かって猛スピードで突進してきた。

「うおっ、危ねえ！」

「避けるな、ダメージ受けてもいいからその盾使つて敵を止めろ」

「は、はい！」

「片手剣の盾持ち剣士は盾を使つていかにして敵を止め、どうアタックカーに繋ぐかの役職だ。」

少しくらいHPが削られるのを怖がるな」

そうして、突進を避けられたイノシシはそのままの勢いでルアの方へと向かつて行つたがそこでミオンが動いた。

「牽制します！ 『大いなる水よ、水球を綴りて敵を撃て』」

「ブビィッ!?!」

「良い判断だ、盾役以外にはダメージを与えさせるな」

「てい！」

「弓行きます！」

「ルアもハルトも良い感じだ」

一旦タンカーが抜かれたものの、直ぐに体制を建て直してレンがきつちりと盾役をこなすことで超安定した感じになった。

ヒーラーと盾が居るとそれだけでかなり違うものだ。

それからは何度か危ないところがあるものの、安定してレベル3のブルーブルを削りきった。

「意外と行けましたね」

「はあはあ……た、盾役って予想以上にしんどくね?」

「頑張れ頑張れ、今のをあと16体倒せばレベルが上がるぞ」

「お、お兄さん、あれ16体ってかなりヘルモードだよ?」

「攻略組はもつと過酷な、って言おうとしたけどアイツらユニークスキルとか持つてるんだよな……」

「そりゃアレベラゲもどんどんできるよな」

チート持ってデスゲーム攻略とか一体これはなんなんだよって感じだ。

まあ、チート筆頭の俺が言うことでもないかもしれないが反則もいところだ。

ただ、ユニークスキルがないβの時代にも一切デスペナを受ける事無く、ソレベラゲを続けていたプレイヤーも何人かいる。

あの変態☆紳士さんを筆頭にα版のランキング上位数名はβでも強さの桁が違ったらしい。

一位の変態☆紳士さん以外にも、2位の『自爆特攻』という二つ名を持つ、しばぞうというプレイヤーも完璧な間合い管理と立ち回りでまるで芸術のように敵を倒していたし、3位の『絶剣』黒の剣士はまるでその名の通りにどこかのラノベから出てきたような剣技で敵を圧倒していたという。

「お兄さん、ユニークスキルを持ってないプレイヤーも普通に強い人いるよ?」

例えばあのゼ・ツーさんとか」

「あー、14位の人か、ならお前らにもできる!」

「とりあえず最低でも今日中にレベル上げるぞ!」

「「「はい！」「」」」

ユニークスキルか……。

俺も何か一つは欲しいものだ。

そんな事を妄想しながら俺は今日一日かけて5人を育成して行くのであった。

新せかわ総合掲示板

『せかわの強者について語るスレ』

1…伝説の情報屋の伝説

公式掲示板の機能が微妙との事でギルメン限定の新掲示板を作成しました。

とりあえず、ID機能とレス番とアンカー付けました。

他にも欲しい機能があればよろしく。

この板は1番上に固定されます。

2…名無し

>>>1

サンクス!

3…名無し

>>>1

確かオリジナル掲示板は結構金使うやろ?

幾らかかったん?

4…伝説の情報屋の伝説

>>>3

5000ガルン、500万円もかかるとは思いませんでした。

5…名無し

>>>4

管理人、明らかな攻略組で草

6…名無し

>>>5

伝説の情報屋の伝説はあの【情報屋】のジータスやぞ?

7…名無し

マジかよwww

非戦闘員なのに攻略組いたのかよ。

8…黒の剣士

>>>4

1000ガルンくらい出そうか?

というかこれみんなですべきじゃないか？

取引板の方も募金募ったのに一人で立てるのはさすがにアレじゃないか？

9：名無し

>>>7

ソピアちゃんをペロペロし隊とかそういう名前のパーティーでおつたはず。

10：伝説の情報屋の伝説

>>>8

まだ4000ガルンあるし、大丈夫です。

>>>9

違います。

11：名無し

今回のボス攻略ってそんなに貰えんの!?

一回参加するだけでも大富豪じゃねえか!

12：名無し

>>>11

東が11000、南が9000、西が6000、北が3000。

それに階層数を掛けた数出るらしいぞ。

13：名無し

>>>12

やっぱ、東の人3300万円かよ。

14：変態☆紳士

>>>13

316万8000ガルンだから31億6800万円な？

今回は一人で討伐しても96人分出る。

15：名無し

>>>14

桁がインフレしてて草www

16：名無し

>>>14

や、やば……城買えるやん。

17：変態☆紳士

>>16

城みたいに巨大な宿がたってるだろ？

あんなめちやくちやな宿建てたらかなり使うはずやぞ。

18：名無し

>>17

既に城買ってたわ。

それにしてもあれ、幾らしたんだろな。

どうせ情報屋さんは調べてるんやろ？

19：伝説の情報屋の伝説

>>18

隣のお店も含めてだと、

最低で7億円、推測だけ……

最高で9億5000万円くらいなかんじです。

20：名無し

>>19

やっぱ、どう考えても城レベルじゃねえか。

21：無名の剣士

実際に城レベル、何部屋あるか検討もつかんくらい広い。

地下入ったら直ぐに自分の部屋の近くに辿り着くようになってる

みたいだからそんなに体感はないけど、下手したらプレイヤーの1%

くらいなら普通に泊まれる可能性がある。

22：名無し

>>21

1%は盛りすぎだろ、1.4万人やぞ？

せいぜい泊まれて1000人程度だろ常考

23：名無し

多少はデカいとは思ってたがそんなにデカかったのかあれ……

24：伝説の情報屋の伝説

総部屋数が800部屋らしいですね。

地球の大規模マンションとかと比べると小さいですよ。

25：名無し

>>>24

それでもかなりでかい方で草。

26：名無し

>>>24

もしかして利回りとかも調べてる？

27：伝説の情報屋の伝説

>>>26

えーと、約4・2%くらいかと。

28：名無し

>>>27

あの宿屋、設け出てたんやね。

29：名無し

>>>28

そりゃあ出てるやろ。

聖人様も10億円ポンとプレイヤーの為に使うような真似はしな

いだろ。

30：変態☆紳士

>>>27

嘘だろ……あれで設けあるんだな。

31：名無し

とりあえず本題入らね？

ここはせかわの強者について語るスレやろ？

32：名無し

そう言えば今回ってランキングシステムないよな。

誰か勝手に作るか？

33：伝説の情報屋の伝説

>>>32

そのうち追加します。

34：ナハト

>>>33

私が次は作りますね。

35：黒の剣士

>>>34

なら俺も半分出します。

36：しばぞう

>>>35

のこり1／3出すわ。

37：ボットマスター

>>>36

つ25%

38：タピオカ

>>>37

つ20%

39：リザレ

>>>38

つ1／6

40：名無し

上位勢が一気に集まってきて草www

41：変態☆紳士

俺が呼んだ、とりあえずランキングは後で作っとくわ。

42：名無し

>>>1

情報屋さん、上位プレイヤーTOP20くらいで二つ名まとめ出せる？

43：伝説の情報屋の伝説

>>>42

N01、【万戦万勝】の『変態☆紳士』

N02、【自爆特攻】しばぞう

N03、【絶剣】黒の剣士

N04、【ボットマスター】イチロウ

- N 0 5、【芋団子】タピオカ
 N 0 6、【超怨念】ナハト
 N 0 7、【大聖堂】ユーンネス
 N 0 8、【魔弾】ソピア
 N 0 9、【絶壁】リザレ
 N 0 1 0、【聖戦】ライトニア
 N 0 1 1、【狂気】の『ハイパージエノワームストロングカスタム』
 N 0 1 2、【非生産的恋愛倒錯者】の『ホモ×ゲイザー』
 N 0 1 3、【混ぜるな危険】アルカリ性洗剤
 N 0 1 4、【白き閃光】ゼ・ツィ
 N 0 1 5、【異端審問官】クソワロドスコイ
 N 0 1 6、【社長】アサバ・クロスフェード
 N 0 1 7、【北風】お日様に負けたデブ
 N 0 1 8、【蛮族】トラスコ
 N 0 1 9、【熱風】MA☆TSU☆O☆KA
 N 0 2 0、【法を超えし者】ローリタ・コンプレックスペ・ロペロペーロ
 4 4：名無し
 >>4 3
 仕事早すぎて草
 4 5：変態☆紳士
 >>4 3
 大聖堂は最初からログインしてないっぽい。
 つまりは【極東の聖人】（名称不明）を加えたのが上位20って事になるな。
 4 6：とある神官
 >>4 5
 嘘だろ!?
 ユーンネスちゃん居ないの!?
 俺は明日から誰に向かって祈ればいいんだ！
 >>4 7
 に祈るわ

47：黒の剣士

そう言えばトラスコがデュエルするらしいぞ。

48：名無し

>>>46

トラスコに祈れwww

49：とある神官

嘘だアアアア!

50：変態☆紳士

>>>47

おお? ソースは?

51：ナハト

>>>50

昨日一層に戻った時に蛮族が10歳くらいの女の子とぶつかった
んですよ。

それで、怒ってその保護者に喧嘩売ったみたいです。

ソースは私。

52：タピオカ

そう言えば昨日言ってたね。

53：カワイイ・イズ・セイギ幼女を愛でし者

その幼女の画像キボンヌ

54：伝説の情報屋の伝説

>>>53

どうやってルビ振りました?

そのやり方とトレードで良いですよ。

55：変態☆紳士

>>>53

嘘だろ!?

これ、ルビ振れたのかよ!

56：カワイイ・イズ・セイギ幼女を愛でし者

DM送りました、情報屋さん。

画像お願いします。

- 57：ボットマスター
>>56
ちよ、勝手に売るなよ！
それ見つけたの俺やぞ！
58：しばぞう
情報屋さんが知らない情報が出たの初めて見たわ。
59：伝説の情報屋の伝説
>>58
そりやあ僕だつて知らない事の1つや2つはありますからね？
つ【画像】
60：カワイイ・イズ・セイギ幼女を愛でし者
>>59
おお、感謝！
61：リザレ
>>58
こんな小さい子までおるやね。
62：変態☆紳士
こんな幼女に喧嘩うる【蛮族】の蛮族っぷリエエ
63：ぜつっー
新板が、出来たと聞いて、飛んできた。
ゼ・ツー心の俳句
64：変態☆紳士
で、その対戦相手は？
65：伝説の情報屋の伝説
>>64
隠蔽スキル所持してたという事は確定ですよ。
66：ナハト
>>64
ついでに恐らく殴り呪い師で間違いないかと。
ユニークスキルの千変万呪で確認済みです。
67：名無し

>>>66

ユニスキずるい。

68：名無しの槍使い

>>>67

α版で2億の頂点に立つプレイヤー12人に入った正当な報酬やろ。

69：名無し

>>>67

そんな事言うなら今からでも遅くないぜ？

レベル1で単身ボスクリアしてみろよ。

70：変態☆紳士

>>>67、>>>68、>>>69

喧嘩すんな。

71：タピオカ

隠蔽と呪われ体質と呪い系の何かと格闘。

4つスキルあるのか？

72：伝説の情報屋の伝説

>>>71

恐らくINT系のキャラメイクなのでかなり器用貧乏なプレイヤーだと思えますよ。

蛮族の相手は厳しいかと。

73：ナハト

>>>72

何か凄い自信満々みたいでしたよ？

74：名無し

>>>72

まさかあの伝説のINT、AGI型キャラメイクか!?

75：変態☆紳士

>>>74

俺がイベントで初期キャラ使ってボス狩りしまくった時のキャラメカ

76：名無し

>>75

ですです！

あれでプレイヤースキル神クラスなら余裕じゃないですかね？

77：黒の剣士

>>76

言っておくがVRじゃ無理だぞ、あれは。

βテストの時にやってた人いるけども撃沈してた。

78：しばぞう

>>77

それ、俺じゃねえか!?

79：ぜつつー

しばぞうさんで無理なら変態☆紳士さんにしかできないポイですね。

80：変態☆紳士

全員でそのPVP観戦しに行こうぜ。

トトカルチヨだトトカルチヨ！

俺、その謎のプレイヤーに2000ガルンな？

81：ボットマスター

>>1

情報屋さん、その人βテスター？

82：伝説の情報屋の伝説

>>81

多分違いますよ、名前名乗ってなかったので正確な事は分かりませんが。

83：ボットマスター

>>80

じゃあ俺、蛮族に2000ガルンで。

84：ナハト

>>80

私は謎プレイヤーに2000ガルンで。

85：黒の剣士

>>80

ギャンブルシステム作りしました。
っ【こちら】

とりあえず作ってみたんだが、5000ガルンも吹き飛んだOrz
86：筋肉もりもりマッチョメン

>>85

お前といい、情報屋といい、どうしてそんな大金を一気に使えるんだ……。

87：変態☆紳士

>>86

そのうち誰かがやってたことだろ？
なら一番最初にやれば間違いなく権力を握れる。

88：名無し

>>87

一番権力を持つてるであろうプレイヤーが言う謎の説得力があるな。

89：ナハト

今一番権力があるのって極東の聖人さんじゃない？

なんか表スレで転移の広場の買収を考えるとかも書いてたし……。

90：変態☆紳士

だろうな、金銭面では間違いなく勝てないな。

今のところ最低でも向こうは20億円くらいの資産を持つてる事になるからな。

91：しばぞう

銀行、いや、金融機関を誰か作るか……。

92：変態☆紳士

>>91

金融機関は怖くね？

一応、できなくもないとは思いますがこれは担保キャラクターにしたらどうなるんだ？

即死するとかなら信用創造できんぞ？

93：黒の剣士

そう言えばどうなるんだろう？

情報屋さんは知ってる？

94：しばぞう

たしかに、担保キャラクターで即死するなら仮に聖人様が20億預けて手元に20億円ある時に、他のプレイヤーが10億円借りて、聖人様が20億引き出そうとしたら即アウトやる？

無理ゲーじゃねえ？

95：名無し

誰も怖くて試せない説。

96：名無しの剣士

いや、試す方法は結構あると思うぞ？

例えば人を殺したプレイヤーに担保キャラクターで貸出して実験するとか。

97：ボットマスター

>>>96

思いつきり人体実験じゃんか。

というか、犯罪者に対する処置とかも整備しないとダメだよな。

このままアウトローだとそのうちヤバいのが出てくるぞ。

98：名無し

ブラックになったら圏内にはもう入れないんじゃないですか？

99：黒の剣士

>>>98

ブラックになっても町の中に自分の土地があれば圏内にそのまま居座れる。

入れないわけで強制輩出されるわけじゃないからな。

さらに完全決着デュエルで決着をつけるとイエローにはなるがそれだけ。

つまりは睡眠PKはかなり有効。

100：変態☆紳士

法律とかもしつかり整備するか……

問題は極東の聖人なんだよな。

一番金も力もあるやつと意見の食い違いが起きたら間違はなく悲惨な事になるんだよなあ……

このスレッドは100を超えました。

もう書けないので、新しいスレッドを立ててくださいです。

閑話『Sidler』

私は二星^{ニッポシリ}瑠璃、本の1週間ほど前はどこにでもいるゲームが好きな女子高校生だった。

そんな私がこんな殺伐としたデスゲーム世界に来てしまったのはなぜなのだろうか？

幼なじみで、同じくクラスの鍊太郎に誘われたから？

それとも、私が『せかんどわーるど』なんでゲームが好きだったから？

私はたしかにゲームが好きだし、こういうVRものの小説も好きだ。

もちろんその中には有名なアルファベット3文字のデスゲームものも含まれている。

ただ、実際にデスゲームに閉じ込められるとなると話は変わる。

こんな私だって現実では普通の少女で、デスゲームみたいな自分の命を賭けたゲームに参加しろなんて事を言われたら無理だ。

死ぬのは嫌だから。

デスゲームになるとは知らずにあの時の私は鍊太郎にプレゼントされた『わーるどだいばー』を使って、ただ遊ぶ為にゲームへとログインしたので。

キャラクターを作ってログインしたら、いきなり邪神とかいうキャラクターにデスゲームだという宣告をされた。

初めはよく飲み込めずに『ゲームの演出かな？』とか思っていた。

でも、鍊太郎……いやレンとカオリとハルトの3人と出会ってこの世界が本当にデスゲームだという事を知ってしまう。

私は英雄じゃない。

ふとした時に何もできずに死んでしまうモブみたいな奴だ。

そういう現実を叩きつけられたみたいで、胸がキューって苦しくなった。

それからはとにかく泣いてる所を見せたくなくて。

とりあえず一人にさせてと頼んでから、たまたま見つけた公園で私は独りで泣いていた。

もう帰れない。

帰れたとしてもかなりの時間が経っているはず。

友達三人は一緒だけど、知り合いはそれだけ。

お母さんも、お父さんも、いつもは頼りになるあの兄も居ない。

あまりの絶望に打ちひしがれて、少し泣いてしまった。

いや、少しどころじゃなかったかもしれない。

そんな時、ベータテスターでα版の方でもかなりのランキング上位者であるゼ・ツーさんにであつた。

泣いている私を見掛けて、優しく声をかけてくれたのだ。

私がなんで泣いているのかをたどたどしく説明すると、彼は優しく説明してくれた。

「俺は君とは違って帰りを待っている家族もいなければリアルに友人もいない。

だから帰らなくても別にいいんだ。

でも、俺は戦うつもりだ。

あーっと、もちろん君と一緒に死ぬのは怖いよ?」

「じゃあ……なんで戦うんですか?」

「まあ、リアルの俺はクズみたいな奴でね。

親に迷惑かけるわ、友人に迷惑かけるわ、親戚に迷惑かけるわと……そんな事をしていたら全員から捨てられた。

それからはネットに逃げて逃げてでね、でもこのゲームを見つけ、初めて本気で何かをするって事ができたんだ。

死んだように生きていたからこそ、この世界ではちゃんと生きたいんだ。

だって、せっかく貰った二回目の人生だぜ？

人間やり直せるチャンスなんて中々ないんだ、だからこそ今を必死に生きる意味があるんじゃないか？」

説明下手で、話すのも下手で、でもどこか必死で。

彼もまたたどたどしく説明してくれた。

今この瞬間を生きるという意味を。

優しく、丁寧に。

そして、最後に彼はこう言った。

「大丈夫だ、君は生きれる。

リアルでめちやくちやだった俺だって頑張れるんだぜ？

リアルで生きてたお前が生きられないわけがないじゃないか？」

「……本当に生きて、このゲームをクリアできるんでしようか？」

「安心しろよ、絶対に君が生きている間にクリアされる。

もしかしたらもう、最初のボスが討伐されるかもしれないぜ？」

「ふふ、なんですかそれ」

私がそういつた瞬間。

ポーンという効果音が流れてこういうシステムメッセージが流れた。

『第一層、東エリアのボスが討伐されました！』

「おい、マジかよ……本当にクリアされやがった」

「ゼ・ツーさんは予言者ですね」

彼の必死な説明を受けて私はすっかり笑顔を取り戻せていた。

彼の必死さが、彼の本気さが、何故か私の心に光をもたらせたのだ。

「ゼ・ツーさんの事、ちょっと信じてみます」

「あはは、良かった。」

それじゃ、俺は行くよ頑張ってね」

その後、私は三人の元へ戻って『ルリ』ではなく『ルア』としてリアルの三人ではなく、ゲームの三人として。

一緒に、本気で生きる事を決意したのだった。

それから私達はしばらくの間情報収集に集中する事になった。

この中にはベータテストの経験者は一人もいないのでVR版についての知識が圧倒的に欠けていたのだ。

チュートリアルもなければ、ヘルプもないというある意味超鬼畜な難易度。

そんな難易度のゲームで自分の手で新たな道切り開いて、情報を集めて生きていかなければならないのだ。

知っていそうな人を探しては訪ね、探しては訪ねをしているうちに掲示板の事を知り、Wikiなんてものまで作ったプレイヤーが居ることに気がついた。

今までのこの苦労はなんだったのかと、萎えそうになったけれど、これも一つの経験だと思って一つ一つの情報をしっかりとみんなに共有していった。

そうして、ある程度情報が集まった時。

私達4人は北エリアに行つて狩りをする事にした。

結果は狩りどころじゃなかった。

町から出て次の村へと進む時に、悪質なプレイヤー12人に囲まれて一気に私達は追い詰められていった。

金を差し出せ？

アイテムを差し出せ？

身体を差し出せ？

心が弱っている頃の私ならコイツらに屈してしまったのかもしれない。

でも今は、あの人が言ったように。

『死ぬ事よりも、生きていないのが嫌だった』

「必死に生きて、必死に頑張れば、夢は叶う……か」

「ルアちゃん、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ。」

……あ、ここの紅茶って本当に美味しいんだね」

「ああ、たしかに美味しいよな」

必死に生きて、必死に足掻こうとしていれば、彼の言った通り本当に助けが来てくれた。

黒髪で茶色い瞳をした物凄い強い男の人。

何か物凄い武術を使って触れるたびに相手を倒していたのはまさに神業としか言い様がなかった。

嘘だとかいってだけど、妙に様になってたし、恐らく本当にあの人は武術の達人か何かだと思う。

彼は間違いなく極東の聖人、その第一候補だ。

決め手になったのは決闘を申し込まれた時だ。

彼はボス戦に参加していないプレイヤーで、つまりは二つ名持ち程の慣れもレベルも無いはずなのに勝つ気満々だった。

恐らくだが、彼もそこまで本気に隠すつもりじゃなかったのだと思う。

「す、すいません、遅れました！」

あ、あの……シオンさんから連絡があつて、今日は明日の決闘の準備をするから来れないみたいです」

「本当に決闘受けるつもりなんだな……」

「そ、そうみたいですわね」

「ねえ、ここの紅茶すつごく美味しいよ？」

「ミオンちゃんも飲んでみる？」

「あ、ありがとうございます」

ミオンちゃんはシオンさんについてきた少女で、どう見ても小学生にしか見えないのだが、本当に19歳らしい。

最近学校で習った数学の問題やら物理の問題を出してみたのだがあつさりと解いてしまった。

最初は年齢を聞いた時に、キャラメイクで作ったのかと思っていたのだがどうやらこれが彼女のリアルらしい。

人体の神秘って本当にあるなんて事は、彼女を見るまでは嘘だと思っていた。

「あれ？ 君達って確か『蛮族』と決闘するの人のパーティメンバーですよね？」

私達が今日の予定を決めていると隣の席に見覚えのある人達がやって来た。

とても動きやすそうな格好をしている黒髪のショートヘアの女性プレイヤー。

『超怨念』の二つ名を持っている第六位のナハトさんだ。

「な、ナハトさんじゃないですか！」

「こんにちは、怨念のお姉さん」

「あはは……怨念のお姉さんってまるで幽霊みたいな呼び方ですね。

あのリーダーの方はいないんですか？」

「あ、リーダーは一応俺です。シ……うぐつ、ちよ、何するんだルア!」

レンがうつかりとシオンさんの名前を出そうとした時、私は全力でレンの口を押さえつけた。

シオンさん、極東の聖人のプレイヤーネームは私の切り札になる武器だ。

こんな簡単にカードを切られたらたまったもんじゃない。

「個人情報保護、人の名前は勝手に教えない方がいいよ？」

「のこりの3人も注意してね？」

「は、はい」

「俺はレンみたいにお喋りじゃないから大丈夫だ」

「え、えと……気を付けます」

「レンはそこで反省してる事」

「すまん、頼む」

よし、これでレンが黙ってくれた。

後の三人は一番歳上のミオンさんと、日頃からそこまで喋らない2人だから安心していいだろう。

「あの方が仕切ってましたけど、システム上のリーダーはそのレンです。」

「あのお兄さんは明日の決闘の準備してますよ」

「という事は逃げたりはしない感じですか？」

「お兄さんは育神流合気柔術の継承者で、本当に強いんですよ。」

「あの蛮族って人くらいなら片手で捻れると思いますよ？」

「え、ええと？ 何の継承者です？」

「武術の神が江戸時代に作ったとされる柔術の流派らしいですよ。」

電光石火の動きで相手を翻弄し、本来なら振れるだけで相手を倒せるらしいです。

ゲームなので、三割くらいの力しか出せないみたいですが」

こういう時は適当に設定を作って言っとくのが吉だ。

シオンさんは、こういうアドリブで設定とかを作ったりするのが好きみたいなのでめちやくちな設定でも作らなければ対応してくれ

るはずだ。

それに、実際に私を助けてくれた時は目にも止まらぬ速さで相手を倒してたし何とかなるはずだ。

「な、何そのめっちゃくちゃな人」

「あの奥義、『不可説転』だっけ？ まじでヤバかったよな」

「る、ルアちゃんの言ってる通りに、触れただけで相手が飛んでましたね」

「まるでアニメや漫画の中から出てきたみたいでした！」

「本当にそう言う武術ってあるんですね……」

なんか丸め込めた気がする。

三人とも実際にあの光景を見ただけあつて嘘はついていない。

仮に、そういうった事を見抜けるスキルがあつたとしてもこれなら多分大丈夫だ。

「あの、もし良ければその人に伝言を頼めませんか？」

「内容によるけど何って伝言を伝えればいいの？」

「えーと、あのデュエルを闘技場でやる事にしても良いかという事です。」

もし良ければ観客を呼び込んで、賭けなんかをしたりしたいのですが」

そう聞いた瞬間、私は机に手を置いてナハトさんの方へと身を乗り出していた。

「その話、詳しくー！」

イブシロン

耳元に聞こえてくる可愛らしい声と、ゆさゆさと身体が揺さぶられる感触で俺は心地良い目覚めから目を覚ました。

「オーナー、起きてください。」

「オーナー」

「う、うんん？ おはよう、支配人ちゃん」

「はい、おはようございますオーナー。」

「それと私の名前はカグヤです」

綺麗な白髪と透き通るような紅い瞳をした、まるでフィギュアのような可愛らしい少女。

月額5000ガルン、月給500万円の子にして極東商会の支配人、カグヤ。

俺の一日は大抵彼女に起こされることから始まる。

その透き通る声は俺の耳からすーっと脳に入ってくるように響き渡り、俺に一日の活力を与えてくれる。

年齢は16歳らしいのだが、とても16歳とは思えないような知性を発揮している。

具体的にどれくらい凄いのかテストしてみた所、22桁までの四則演算であれば暗算でほんの数秒で解けるくらいヤバい。

彼女がただのこうすればこう反応するというプログラムの積み重ねによるAIなのか、それとも本当にこの世界で生まれて生きてきた人間なのかは俺には判別する事ができないが、どう見ても普通の人間にしか思えない。

可愛いは正義だ。

「オーナー、明日は決闘に行かれるんですよね？」

「今日はその準備ですか？」

「ああ、と言っても第三層でレベルをあげるだけなんだが……」

対戦相手の二つ名は『蛮族』、名前はトラスコ。

第18位にしてプレイヤー最高峰のバトルアックス使いらしい。

レベル上げをしなくても勝てるだけなら勝てるとは思うのだが、どうやら『蛮族』が決闘騒ぎを起こしたという情報が既に出回っているようで、掲示板では既に賭けをするプレイヤーや観戦希望のプレイヤーがそれなりにいるらしい。

ネット上ではやっぱり二つ名も無く、名前も明かされていないプレイヤーよりも『蛮族』に賭ける人が多くいるようだ。

仮に無名のプレイヤーが第18位、プレイヤーの上位勢である『蛮族』のトラスコに勝ったともなればそれこそ大騒ぎであり、どこに行っても俺は引っぱりだこになる事は間違いない。

考え無しに決闘を受けた俺が馬鹿だった。

もうこうなってしまうえば俺も極東の聖人の図が成立するのは必然と言える。

なら色々と出てくる面倒事を回避する為にはこちらから『極東の聖人』として決闘に現れるしかない。

俺はあの時は仮面もローブも付けていなかったなのであそこで見ていたプレイヤーには正体が割れる可能性があるのだが、今回観戦に現れるプレイヤーはあそこに居たプレイヤーとは比べ物にならない。

幸い、写真などは撮られていないみたいなので、これからプライベート以外は常時あの仮面姿で過ごしてやればいいだろう。

「よし、じゃあそろそろ俺は行くとするか……」

カグヤ、今日も一日しっかり頼むぞ？」

「はいオーナー！」

□□

偶然出会ったミオンに今日は決闘の準備で一人で行動させてもらうと伝えてから俺は三層へと足を運んだ。

真つ当にレベル上げを行ってももちろん良いのだが、それよりもボスに挑んだ方が圧倒的に効率が良い。

ボスの経験値は通常の敵より遥かに多く設定されており、レベラゲをしてボスを倒すのとボスを倒してから次の層でレベル上げを行うのを比べた時、明らかにボスを倒してからレベル上げをした方が効率がいいのだ。

通常なら低レベルでボスに挑むのはデスペナを受けるだけなのだが、幸いな事に俺のHPは0であり死ぬ事は無いのだ。
ボスに挑まない理由がない。

そのまま東エリアまで走ろうとした時、目の前から声が掛けられた。

「おやおや？ さすがシオン君だね。

いきなりボスに挑戦かい？」

「うおおおおツツツ!!」

俺が驚いているのには理由がある。

まず一つ、さっきまで目の前には誰もいなかったから。

いきなり人が目の前に現れたら誰だってビビる。

そして、その現れた奴がまるで有名な日本の映画に出てくるあのキャラクターのような姿だったら尚更ビビる。

黒い影のような体に、かなり怖めな白い仮面。

そんな奴が眼前に飛び出てくれば超怖えよ。

ついでに俺の名前をそいつが知っていて、俺の肩にポンと手を置い

てきたらもつとビビる。

「今から君は『一体、お前は何ナシなんだ』と言う」

「い、一体、お前はナニナシなんだ？ はっ!？」

「イブシロン どうも、εです」

い、いぶしろん？

イブシロン……えと、えーと、ギリシヤ文字だっけ？

いや、どう見てもそんな海外な名前じゃなくてクビナシじゃねえか
!?

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて。」

ほら、君にもこのこのお面をあげよう」

「テツテレー！」

『フェイス・オブ・ジ・アンリミテッドークビナシを入手しました!』

謎の効果音と共にアイテム詳細が強制的に開かれた。

【フェイス・オブ・ジ・アンリミテッドークビナシ】

ランクSSSS

頭部装備。

重量0

特殊スキル

全ステータス+5%

身体変形【クビナシ】

破壊不能

破棄不能

取引不可

装備外操作不可

説明

世にも珍しいSSSランクアイテム。

どこからどう見てもまさに国宝級の逸品であり、売れば1億ガルンはくだららない。

イブシロン

εによつて色々と操作がされており、上昇ステータスの低下の代わりに身体変形「クビナシ」が付与されている。

また、このアイテムは装備する以外に使い道がなく、アイテムの素材にする事も出来ない。

このアイテムを持っていてるプレイヤーがこのアイテムを一週間で1時間以上使用しなければ、そのプレイヤーの背後にクビナシのエフェクトが300時間表示されるようになる。

「……」

「装備しないの？」

「なんだこの呪いのアイテム!？」

「でもクビナシ可愛いよね？」

「可愛くねえよ!? 怖えよ!」

いや、でもよく見れば可愛い。

あれ？

クビナシってこんな可愛かったっけ？

……ダメだ、クビナシが可愛く見える。

「つて、待て待て待て！」

何しやがった!？」

「え？ クビナシが可愛く見えるつて？」

ようやくこの世界の真理に気がついたみたいだね」

「違えだろ!?! 絶対お前がなんかしてるだろ!」

「ぶーぶー」

「テデーン!」

『ああつ！ クビナシの加護を失ってしまいました！』

『な、なんとということでしょう!?!』

え、SSSランクのアイテム、フェイス・オブ・ジ・アンリミテッドークビナシが壊れてしまいました!』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「なんか言えよ!?!」

ダメだ、疲れる。

ペースがめちやくちやに乱されてまともに会話すら成り立っていない。

「さて、君は僕の正体に気がついている頃かと思いましたがだーれだ?」

「か、神変態?」

「ぶつぶく! 違いまあす!」

「可愛い可愛いクビナシのεちゃんでした!」

「ぶつ殺すぞ、てめえ!」

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて。」

「冷静さを保てないやつは早死しちゃうよ?」

「……………」

もうこいつ本当なんなんだよ……………。

クソ野郎じゃねえか。

本当に同じ人間なのかガチで疑問だぞこれは。

「さてさて、前置きはそろそろ終了にして、本題に入ろうか。

ゲーム内唯一の不死属性を持つシオン君?」

「…………剥奪に来た、そういう事か?」

どう考えてもコイツは運営側の人間だ。

そして、俺は恐らくバグのようなものなのだろう。

HP0と邪神の温情、明らかにゲームのパワーバランスを崩壊される要因をいつまでも運営が残しておくとは思えない。

ような気がしてるんだね、うん。

でもそうじゃないんだよなあ。

つまり俺が出した結論は間違いだということだ。

ん？

今なんかおかしかったような……。

ん？ 気のせいじゃない？

あくなんだ気のせい……

「つて人の心の声に直接割り込んで来るんじゃないよ!？」

「てへ？」

「こ、こんな事もできんのか……一体どんなシステムで動いてるんだよこのゲーム」

「実はこれ、ゲームじゃないよ？」

ほら、最初に邪神が言ったよね」

たしか、この世界をVRMMOだと思っ込んでいるはずだが、それは間違いである。

ここは正真正銘の幻想世界、ファンターシエである。だったか？

たしかにこれが真実かもしれないという考察はある。

それに、NPCが本物の人間にしか見えない上に、神変態がどうやってこの技術を生み出したのかも謎だ。

「……」

だが、本当にそうなのだろうか？

現実問題としてそんな事ができる奴が本当にいるのだろうか？

ここを考えても無駄だね。

だって過去の出来事が全く参考にならない自体だって沢山あるし、過去のルールが今も適応されている可能性もないし、過去が作られた可能性もある。

だからこの疑問に答えを出すのは無意味なんだよ。

「ほら、どんな物事も一番最初にやったら過去の事は参考にできないよね？

君の考えている世界の法則が次の瞬間も当てはまる可能性があるかい？

そもそも、地球の過去が作り物でない保証はどこにあるの？

ほら、君もこのゲームのNPCみたいに作られた存在で、そう思い込んでるだけかもしれない。

人間の知性で測れるものなんて所詮はほんの少しなんだよ」

『ただ事実は今この瞬間のみにある』だっけか？

有名な哲学者の残した名言だ。

起きた出来事も、知識も、経験も全ては無意味な幻想にすぎない。

今この瞬間に何かを感じているという事だけが事実で、あとはどれを信じるかという信仰の問題というわけだ。

「……分かった、とりあえず俺はお前を信じよう」

「そう？」

「で、用件はなんなんだ？」

「ちよつと話がしたかったただだよ、変態☆紳士君とは既に話したからね。

君とも話しておかないとフェアじゃない」

変態☆紳士さんと俺？

共通点といえば強いって事くらいだろうか？

俺は不死身、あの人は最強のプレイヤースキルとかなり強さの種類が違うものの、このゲームの最強候補だということは正しい筈だ。

「俺は別にそんな強くは無いと思うんだがな……」

「気が付いてないだけだと思っけど、君、変態☆紳士君よりもこのゲーム上手いよ?」

「は?」

「おかしいとは思わないかな?」

君はいつからそんな高度な武術の達人になったんだい?」

「そりゃあα版で……!?!」

気が付いたのは些細な事実。

ただとても重要で、間違いなく何かの鍵になる事は間違いがなかった。

俺はいつの間にか、ただの画面越しにやっていたゲームの経験を現実の経験のように感じるようになっていた。

そう、できるわけが無い。

いくらプレイヤーがスマホやパソコンでキャラクターを操作するのが上手くても、VRとなったこのゲームで同等の強さを発揮できるというのは明らかにおかしい事だ。

ランキング上位勢はたしかに知識はある。

だが、経験はどうだ?

たしかに上位勢にはβに参加していたプレイヤーもいることはいる。

だが、全員がβテスターというわけではもちろんないし。

ついでに言うと、βテストの時から圧倒的な実力を発揮できるわけが無い。

あの変態☆紳士さんでさえも、自分で肉体を動かすゲームで初めか

ら強いわけがないんだ。

「おやおや、じゃあもう1つ耳寄りな情報を

——はね、——だよ」

「マジ、かよ……………」

「あはは、今日は帰ってゆつくりと休んだ方が良いんじゃないかな？」

「悪い、そうさせて貰う」

「まったね〜♪」

支配人カグヤ

イプシロンという人物に出会った後、俺はレベル上げも行わずに第一層へと戻ってきた。

さすがにあんな事を聞かされた後では身が入らない。

……大聖堂ユース、いや如月愛香、俺の妹は無事なのだろうか？

「はあ……」

ふざけた奴だったが、ふざけた奴だったからこそむしろアイツが嘘を言っていたように思えない。

どうすればいいかの判断材料が完全に欠けていた。

「オーナー？ 暗い顔されてどうしたんですか？」

「ああ、カグヤか……ちよつと俺の故郷が、いや、なんでもない……」

この世界の人間のカグヤにこんな事を伝えても無駄だ。

それに、まだ確定した情報というわけでも……いや、強がりはやさう。

ほぼ確定事項だと思っていいたいだろう。

「オーナー、辛い時は泣いてもいいんですよ？」

「かぐや？」

「泣くのは悪い事ではありませんよ？」

いくらオーナーが強くて悲しい事もありますし、辛い時もあります。

見ず知らずの人の前で泣くのが恥ずかしいなら、私がお話を聞いてあげますよ」

「……」

カグヤがそう言ったのを皮切りに、俺の心のダムが吹き飛んだ。色々と一人で溜め込みすぎたのもあるし、いきなり色んな事を詰め込まれてキャパオーバーしていたのもあるかもしれない。

ただ、人に何かを受け止めて貰えるっていい事だなと本気で思った。

「妹が……多分死んだ」

「お、オーナーの妹さんはどんな人だったんですか？」

「バカで、八つ当たりばかりしてくるし、学校の成績も底辺だが、ゲームの才能だけはあった奴だ。」

色々と喧嘩をする事もあったけど、結構仲が良い方だったとは思
う」

ああ、アイツはそういう奴だった。

運動神経も良くないし、成績も悪い、家事や料理をさせてもダメダメ、でもゲームをやらせれば必ず上位に立つ奴だった。

せかんどわーるどα1.0が出た時もの一番にプレイして最終的にはランキング7位にまで上り詰めた。

エンジョイ勢の俺とは比べるのも馬鹿らしいくらいに本気で、あらゆる時間をやりくりしてゲームに熱中する奴だった。

「ああ……そういう奴だった」

「オーナーは妹さんが好きだったんですね」

「好きというか……まあ、嫌いではなかったな」

良くシスコン呼ばわりされる事もあったし、たしかに好きだったのかもしれない。

かなり不名誉な称号ではあるのだが、兄妹の仲がいいと言うのは悪いことではないだろう。

「しは……おっと、カグヤも兄弟っていたりするの？」

「私ですか？ 姉が一人いました」

「そうか、大切にしろよ」

「あ、3年前くらいに亡くなっちゃいまして……今は居ませんよ」

3年前か。

この世界の住人から直接聞くと、本当にこの世界がずっと前からあったのではないかと錯覚してしまいそうになる。

いや、過去なんて今この瞬間は何処にも無いというアイツの言葉を信じるのならそれは正しいのかもしれない。

過去なんて曖昧なものは人の記憶が作り出す幻想にしか過ぎないし、その記憶も『記憶した』ものではなくそう『記憶している』だけだ。

そして、世界の何かに過去を求めようとして記録や痕跡を探しても『それがそこにある』という事実があるだけで『それがいつどこでどうやってできたのか』という事は絶対に分からない。

今この瞬間に世界の法則そのものがかわってしまう可能性も十分にあるし、そもそもこの世界のように誰かがその設定ごと作ったのかもしれない。

だからそう……この世界はずっとずっと前からあって、カグヤも、他のこの世界の住人もずっとずっと前からこの世界で生きてきたのだろう。

今この瞬間、感じているものだけが事実なのだから。

「私の父は商業ギルドのグランドマスターをしてるんです。

そのせいで色々と厳しくて、好きな事もさせて貰えませんでし、ずっとずっと勉強をさせられる毎日でした。

毎日、毎日、毎日、お目付け役を付けられて強制的に勉強させられて、出来なかつたら酷く怒られるんです。

それで、私と違って勉強が出来なかつた姉は自分で自分の命を絶つ

たんです」

「カグヤもカグヤで大変だったんだな」

自殺、か。

悪いことを聞いてしまった気がする。

毎日毎日強制的に勉強をさせられるとかたしかに頭がどうにかなりそうだな。

俺なら発狂する自信がある。

自殺者が出るような環境でむしろ良くカグヤは耐えたな。

というかカグヤの父親って商業ギルドのグランドマスターだったんだな……。

グランドマスターは第十層にある本部にいるんだっけか？

そういえばこの世界の人はどうやって移動しているんだろうか？

「あはは、今は家から逃げ出してここで働いてますけどね。

嫌になって家出しちゃったんですけど、そしたら商業ギルドに圧力が掛けられたみたいで、月給5000ガルン未満の仕事は受けられなくされちゃったんです」

「そうか、それで一人だけめっちゃ高かったのか……」

「はい、それで私みたいな小娘をそんな高額で雇ってくれる所もなく、商業ギルドを介さずに私を雇ってくれるところもなくてもう諦めて帰ろうかなって思ってたらオーナーが雇ってくれたんです」

たしかにいくら才能があるとはいえ、16歳の少女を月給500万円円で雇うかといわれると地球ならまずありえないだろう。

この世界でもどうやらそれは同じようで、彼女のようなまだ若い少女をそんな大金で雇うのはプレイヤーくらいのものなのだろう。

「カグヤはちゃんと、給料分は働いてるからな。」

ここまでの才能の持ち主が月5000ガルンだとかかなりお得な方なんじゃないか？」

「そんな事無いですよ！ 私、書類仕事とかそういうのしかできませんし、今のこの地位も明らかに分不相応です。」

オーナーは私を過剰評価し過ぎですよ」

とは言ってもな……22桁の高速暗算とかもう、人間業じゃないしな。

それに計算以外にも事務系の作業に必要な事ならどんな事でもあつという間にテキパキとこなしてしまう。

それも、他の人や俺が自分でやるよりも遥かに高クオリティでだ。支配人という立場はまさにふさわしいと思う。

俺とカグヤが社長室（仮）で二人で話しているとドアがコンコンコンとノックされた。

どうやら誰か来たようだ。

「どうぞ」

「あの、今お時間よろしいでしょうか？」

鍛冶ギルドのグランドマスターがここの責任者に面会を求めているのですが……」

ん？

鍛冶ギルド？

そんな所のグランドマスターが何の用なのだろうか？

「オーナーが武器屋もオープンさせると言っていたので私が事前に鍛冶ギルドに伝えておいたのですが、もしかして迷惑でしたでしょうか？」

「グッジョブ！」

さすがカグヤ、仕事が速い。

二階層の攻略で結構な大金が入ったのでそのまま鍛冶師を何人か雇っておこうと思っていたのだ。

それにそろそろ本格的に装備を整えておきたい時期だが、プレイヤーの生産職はまだ強い奴がいないのでこの世界の専属鍛冶師が欲しかったところなのだ。

しかもわざわざグラントマスターが直々に出てくるなんて普通はないだろう。

さすがカグヤ。

これなら鍛冶ギルドからスーパーな鍛冶師を雇える可能性がある。

「とりあえず応接室まで通してもらえますか？

直ぐに向かうと伝えてください」

「はい、かしこまりました」

「えーと、オーナーはどうされますか？

もし良ければ来ていただけると助かりますが……」

「うん、行かせてもらおうぞ」

仮面をつけた黒ローブの男が責任者とか言ったら向こうも困惑するとは思うのだが鍛冶ギルドのグラントマスター、やっぱり一度くらいは目にしておきたいものだ。

「オーナーの事は世界最強の戦闘技術を持っている人と伝えてあるの
で、あの人も会いたがっつると思いますよ」

「……俺、そんな大層な人じゃないぞ」

「でもオーナーって戦闘系のクラスをカンストしてますよ？」

「ん？」

戦闘クラスとは一体なんだろうか？

この【せかんどわーど】にはクラスやジョブといった職業系のシ

システムは一切存在せず、プレイヤーの動きを補佐したり、MPを消費する必殺技のようなものが使えるようになるスキルというものがあるだけだ。

それに、格闘スキルなら持っているが熟練度システムとかそういうのは無いはずだ。

「そのクラスってというのはなんなんだ？」

「あ、私の目って実は【天眼】っていう魔眼でして、色々なものが見えるんですよ。」

例えばものを見たら効果や価値、使い方とかが分かるんです」

て、天眼!?

カグヤってそんないかにもユニークなスキルまで持つてるのか!?

「そのスキルで人を見たらクラスっていうのが分かるんです。」

その人がその職でどのくらいの技術を持っているのかっていう指標みたいな感じなんですけど、オーナーは格闘家モングのクラスをカンストしてるんです」

「待て待て待て！」

どのくらいの技術を持っているか。

つまりはカグヤはプレイヤースキルを測定できるってことなのか？

仮にそうだとしたら天眼はやばいとか強いとかそういうレベルのスキルじゃない。

しかも俺の隠蔽スキルを思いつきり貫通してるって事かこれ？

「なんですか、オーナー？」

「あー、まずそのカンストの基準がわからん。」

どれくらいの技術があればカンストできるんだ？」

「私の父の以外でなら、何かのクラスがカンストしてる人なんてオーナー初めてです。」

オーナーの説明の所に『神のごとき技術を持った異世界人』とか、称号に【闘神】や【人間卒業】カテゴライズエラーとかが付くくらいには凄いです」

称号システムまであったのこの世界!?

というか俺はいつ人間卒業なんてものを獲得したんだ!?

思いつきり人間だぞ俺？

「……ちなみに、俺を除くと戦闘系クラスが1番高い人って誰なんだ？」

「昨日お店の方に買いに来てくれた変態☆紳士って人ですね。」

剣士クラスが966で【人間卒業】カテゴライズエラーついてましたので多分そうとうに強いはずですよ」

「俺は？」

「オーナーは1000です」

あ、あの変態☆紳士さんで966？

カンストってどれだけ凄いんだよ……。

割と自慢できるのか？

「今度カグヤが目にしたクラスの高い人のデータを作って貰えるか？

名前とその高いクラスだけでリスト作ってくれと助かる」

「分かりました、明日の夜までには知ってる人達の分を完成させておきますね」

そんな事を話しながら俺とカグヤは応接室まで向かうのだった。

おや、最高の鍛冶師の様子が？

「この俺様が、鍛冶ギルドのグラントマスター。

ドヴォルバーク・タルフォードだ」

そう自己紹介した彼はとてつもない筋肉をその身に宿した小柄な男、どこからどう見てもドワーフだ。

いい感じの髭を生やし、堂々としたその立ち振る舞いはまさに貫禄を感じさせる。

鍛冶ギルドの長にして、このゲームでは錬金術ギルドのグラントマスターと双璧をなす最高の制作職の片方。

ドヴォルバーク・タルフォード、鍛冶師のクラスはカグヤ曰く963という伝説級の人物だ。

「お久しぶりです、ドウォルさん。

「この支配人をさせて頂いているカグヤです」

「初めましてだな、俺はこのオーナーだ。

好きに呼んでくれて構わん」

「おめえがチーフオスの倅の言つてたバケモンか……」

俺が仮面越しに適当にクール系を気取って挨拶をすると、目の前の男は俺をジーツと鋭い目付きで睨み付けた。

「ほう？ おお……すげえなお前さん。

「この俺様が逆立ちしても勝てそうにねえ相手はこれで3度目だぜ」
「強さを測るスキルでも持っているのか？」

「ドヴォルさんは『王眼』という魔眼を持っていて、未来が見えるらしいです」

「未来が見えるか……」

その魔眼超欲しいんだが。

戦闘でそんな魔眼があればほぼ100%勝てるし、戦闘以外でももちろん色々役に立つ。

カジノとかに入ったらマジで無双できそうな能力だ。

「おうよ！ まあ、制限も多いんだがこの魔眼があれば実際に戦わなくても相手の強さが分かるんだぜ？」

しかも実際に戦ったわけじゃねえって事は何回でもチャレンジできる。

つまりはほんの僅かでも勝てる可能性がありやあ100%勝てる能力だ」

なんだそのチート能力。

いや、たしかにそうかもしれない。

1秒でも先の未来が見えるのであれば相手に勝つことなんか容易いだろう。

「先程の間に一体何回試したんだ？」

「1024回、その全てにおいてお前さんの勝ちだ」

「当然です、オーナーは最強ですから」

「よし決めた、この俺様がここの専属鍛冶師になってやるぜ」

「んん!？」

え！

マジで!?

最強の鍛冶師が専属になってくれんの!?

「それだけ徒手空拳ができりや、お前さんには武器は要らねえな？」

ガントレットとレギンス、ついでにその仮面とローブももつといい奴を作ってやるぜ。

雇用条件は諸々の費用の代金として頭に30万ガルン、あとはそうだな……お前さんが持つてるはずの『ワニの宝玉』と『白蛇の魔眼』そ

れと、月にそのの嬢ちゃんと同額ありやあい」

30万ガルン、3億円。

……雇うか。

雇おうか。

そうするか……。

たしかに3億円はデカいが、100%ここを逃したら手に入らない人材だ。

間違いなく値段以上の働きはしてくれる筈だし、今の俺は地球とは違ってかなりのレベルな大富豪だ。

ここは雇っておくべきだろう。

「分かった、雇おう」

「はっ、さすがは大金持ちだな」

「ポーン」

『ドヴォルバーク・タルフォードが極東商會に雇用を申し出でいます』

契約形態：終身雇用

雇用形態：正社員

業務内容：鍛冶に関する業務

出勤休日：週5日勤務、土日は休みとする。

勤務時間：9時～18時まで（内休憩1時間を含む）

基本賃金：月50000ガルン

（初月は契約初めにこれとは別に30万ガルンと『ワニの宝玉』、『白蛇の魔眼』が必要）

「YES／NO」

YESだ。

『雇用契約が完了しました!』

「これから色々よろしくな」

「ああ、こちらこそ頼むぜ」

「それで、鍛冶ギルドの総本部にあるドヴォルさんの工房はどうするんですか?」

「ん? もちろんこっちに引越すに決まってるだろ。」

あれを引越すためにこんな多額の費用が必要なんだぜ?」

ああ、それで3億円か。

って、この世界で引越しに3億かかる工房ってどんな工房だよ!?

この世界には引越しというシステムも当然の如く用意しており、それを使えば楽に引越す事ができる。

宿屋を建てる時や引越す時には、建築の神である『トウ・フリー・ジユタク』という神に金銭を捧げる事で家を建ててもらっているという設定らしく、基本的にボタン1つで家が達し、家ごと丸っと引越しが完了する。

トウ・フリー・ジユタク、豆腐住宅……相変わらずひどい名前である。

家を建てるにはそれなりの金銭が必要になるのだが、引越しは建てるのに使用した金銭の0.5%で済む。

つまりは1000万円の家を買えば5万円の家ごと引越せるのだ。

引越しに3億円使う工房、つまりは600億円、6000万ガロン。転移の広場が6個も買えるとかどんな工房だよ!?

「早速引越しするが横の土地貰っても別に構わねえよな?」

「別に構わんぞ」

俺はこの宿屋を作る時に少し多めに土地を買い取っており、現実では左隣がただの仮設倉庫と化している。

ちゃんとした倉庫もあるし、殆ど使われていないので完全に無駄スペースという訳だ。

善は急げと言わんばかりに、早速仮設してある倉庫とその中の物を本倉庫へと移すとドヴォルバークは引越しの準備を始めた。

準備とは言ってもシステムコンソールを出して画面を表示するだけなのだが。

「じゃあ引越すぜ？」

「やってくれ」

彼がボタンを押すと、そこそこの工房がどこからともなくPON！と現れた。

家ごとの引越しが一瞬で終わるとかまさに神の力と言った感じだ。

だが、見た感じでは到底600億円もする工房には見えない。

「これ本当に引越しに30万ガルンもかかるのか？」

「おうよ、まあ、正確には29万8996ガルンだがな。

端数は負けてくれるんだろう？」

「それはいいんだが、これのどこに6000万ガルンも掛かったんだ？」

「はっ、問題は中だぜ。外見なんぞ所詮は飾りだからよ」

そう自信満々に言うドヴォルバークの後をカグヤと一緒に歩いて行くと中は2点を覗き普通の工房といった感じだった。

まさにアニメや漫画で見た鍛冶師の工房だ。

奥にある炉と金床が【アルトロステ鋼】で出来ていなければだが。

アルトロステ鋼とはこのゲームにおける最強の金属であると神変態が明言している金属だ。

特徴的な少し青みがあった綺麗な緑色の金属光沢を放った物質であり、破壊不能という特性を持つ。

設定上の融点15万1224・182K、覚え方は『1番コイツ強いヤツ』だ。

「か、加工できたのかソレ……」

α版の時はゲーム初期頃のイベントで一度だけ「アルトロステ鋼の塊」というアイテムが登場し、それを取り合つて戦う大規模PVPイベントはかなりの人が熱狂して取り組んだ。

ゲームの終盤に全プレイヤーVS変態☆紳士という状態になり、彼が参加して敗者となった数少ないものの一つだ。

戦っている間に盗賊系のスキルで奪われたらしく、「アルトロステ鋼の塊」入手したプレイヤーは加工して最強の武器を手に入れ、一気に上位プレイヤーの仲間入り……かと思われた。

しかし、残念ながらアルトロステ鋼は素材アイテムのタグが付いていながらも、ただだけ頑張っても加工できなかつたらしい。

「まあ、少しズルだがな。

素材だけ用意してそれを使って家を建ててやればあら不思議つてな。

究極の金属だろうがなんだろうがこの方法を使えばあらかた加工できるつてもんよ。

本物の神様には神話級の金属も叶わねえつてな」

すげえな。

まさかこんな方法があるなんて思い持つかかった。

材料も何もかも基本的に不要で金さえあれば家がポンと出てくるので素材を持ち込むなんてことを考えた事もなかった。

「もしかして、この方法を使えばアルトロステ鋼の剣でも作れるのか

「？」

「いや、無理だ。壁や床と同じで動かせねえ固定アイテムになっちゃう。」

「だが、この金床とコイツと俺様、3つが合わされば加工できるぜ？」

「そうやって取り出したのは緋色に輝く赤い金槌。」

何かバチバチとしたオーラがそのハンマーから迸っており、見るからに凄そうなアイテムだ。

ハンマー、バチバチ、雷、雷神、ミヨルニル……うん、あれだな。

「ワールドエンド・ファンターシエ全金を工む神王の鎚……さすがドヴォルさんですね」

「ん？ わーる、なんだ？」

「100%ミヨルニルだと思ってたんだが……」

「戦鎚と金鎚を一緒にするんじゃないぞ。」

「こいつは代々世界で最も鍛冶の上手い奴のみが使う事を許された、ワールドエンド・ファンターシエ全金を工む神王の鎚、まあ、どんな金属でも加工することができるという神の金鎚だ」

ワールドエンド・ファンターシエ。

「幻想世界の果て、もしくは幻想世界の終わりか？」

名前を聞く限りこれを手に入れる事自体が1つのエンドコンテンツみたいな感じがする。

本当にどんな金属でも加工できるのならば、鍛冶師ならば誰もがこれを手にすることを夢見るレベルのアイテムな事は間違いないだろう。

「それとその金槌があればなんでも加工できるのか？」

「いや、欲を言えばアンビル・オブ・ジ・アンリミテッドが欲しいな」

「おお、出たぞ『アンリミテッド』シリーズ。」

あのクビナシの仮面しか見た事は無いが、恐らく破壊不能でかなり

のスペックを誇る金床アンビルなのだろう。

あのクビナシの仮面もステータスが下げられてあれだったしな。

「分かった、そのうち見つけてきてやる」

「おお、さすがお前さんだな。」

まあ、今のこの設備でもアルトロス鋼程度なら加工できるぜ？

だが、今の俺様にできるのはせいぜいSランク止まりだと思っただれ。

この俺様の見立てならお前さんなら直ぐにSSランクが必要な領域に辿り着く筈だ、そういった時に必要なのが最強の金床ってわけだ」

なるほど、つてSランクアイテムが作れるなら大丈夫じゃないか？

今の所、俺が必要なのはガントレットとレギンスくらいのもんだ。それさえあれば火力も速度も段違いになってくる。

「おっといけねえ、早速俺様はガントレット作りに勤しむが何か要望はあるか？」

「そうだな、火力重視でAGIかSTRに補正が掛かるとなお良いって感じか？」

VITとかDEFとか欠片もいらなからな。

俺のHP的に考えて必要なものはそう言った装甲じゃあないからな。

死ぬ危険性がない以上は速さと筋力があればいい。

「よし、分かったぜ。まあ、3日ほど待ってる驚くものを見せてやるぜ」

ドヴォルバークはそういうと、早速仕事に取り掛かるのだった。

εのファンタジーシエ観光記

かなりの人がいる闘技場のスペースの中で、その一箇所だけは誰も立ち入ろうとしなければ、見向きもしない。

そもそもそのスペースがまるで無いかのように振舞っている。

そんな特等席に座る人影が1つあった。

「イプちゃんって意外と優しいんだね」

その身をこの世界へと刻み込み、無理やり割り込むようにして一人の少女がそのスペースへと君臨した。

それは概念そのものを操る者。

世界樹に存在する228の葉^{世界}でも数少ない超越者だ。

「^{シグマ}σは本当にそう思う？」

そうしてその超越者が声を掛けた存在、この異様なスペースを作り出した者もまた、超越者だ。

まるで影のような身体^{からだ}と、三つの黒い穴が開いた不気味な仮面。

声は中性的な人間の声だが、その異形の姿はどこからどう見てもとも可愛いクビナシの姿だった。

「思うよ、だって絶望や悲しみを消し去るなんてとってもいい事だからね」

クビナシは可愛い。

とてつもなく可愛い。

ああ、クビナシはなんで可愛いのだろうか？

キュートなその目、その口、影のような体。

どこをとつてもパーフェクトだ。

「人の記憶や知識や意思、大切な思い出や絶対に失ってはいけないはずの感情さえも消し去るこのボクが優しいって？」

「ないない、ジョークは程々にしなよ」

それだけではない、その仕草や内面といった所もまさにパーフェクト。

道を歩けば10人中1000人が振り返る程の可愛さ。

世界で一番可愛いと言ってもいいだろう。

いや、間違いなくクビナシは世界で一番可愛いと断言できる。

「でも、嫌な記憶や嫌な思いしかッ!」

「いい加減にしないと殺すよ?」

「いつもと違って短気ですね、凶星ですか?」

あれあれ、凶星ですか?」

ぷぷぷ、ず、凶星ですか?」

そう言っただけで笑った瞬間、σの首が胴体からずり落ちた。

そして、体が一瞬でびちゃびちゃと弾け飛んだかと思えば、徐々に頭がくしゆくしゆと潰されていく。

通常ならどんな存在でも死ぬような中、σは死ぬ事さえも許されない。

「かふ、あ、あ……」

徐々に徐々に潰されていく。

しかし、死ぬことも、意識を失う事も、痛覚を失う事も、心が壊れる事も、正気を失う事も、脳内麻薬一つとして分泌する事さえも叶わない。

そして、徐々に徐々に時間が引き伸ばされていく。

1秒が2秒に、2秒が4秒に、4秒が16秒にと。

「うぐ、あ」

苦痛だけが徐々に徐々にと高くなり。

久遠の時間をゆつくりと味わいながらじわじわと、苦痛のみを感じさせられて生きる。

1年、10年、100年、1000年と過ぎてもその時に終わりが来る事は無い。

これからあと何年、何万年、何億年と過ごす事になるのか。

そんな事を考えながらσは一秒一秒をしっかりと認識させられてただ生きる。

これがε、神にも等しき存在に逆らった罰だ。

「かはっ、あ、あひゃ、あ、あう……はあ……はあ……ほ、本気で死ぬかと、お、思い、ましたよ……」

「キミはなんで文字通りの無限の時を生きても魂が崩壊しないんだい？

まるでビツクリ箱を見ているみたいだよ。

もう一度やってみようかな？」

「は、はあ、ま、待ってイプちゃん！ あと10秒は休ませてね!？」

「全く、なんで君がボクのお目付け役に………はあ」

文字通りの無限の時をただ苦しみながら起きさせられたのにも関わらず、σは割と元気な様子で立ち上がった。

普通ならこの力を喰らえば心が折れるとか、精神が崩壊するとかそういう次元を超えたダメージを受ける。

文字通りの意味で無限の時を生きた者はそれが例え神や悪魔といったあやふやな存在でさえも耐えることはできずに消滅する。

魂とεが名付けて呼んでいるものが壊れるからだ。

ただ、目の前のσはそんな状況にもかかわらずに生きていた。

しかも反省した様子も一切無い。

能力がどうか、運命に愛されているかとかもはやそう言った次元ではない。

わたしはいつもここにいるから
σのその身を世界に刻む者はεにとつての天敵の様なものだ。

なにせσの力は『ただここにいる』というだけでありとあらゆる事象や概念を捻じ曲げて体現するというどうしようもなくしようなもの、たったそれだけの力なのだから。

超越者という者が全員、同じだけの力を持つように世界樹そのものにより調整されている為、幅広い能力を持ったεよりも特化型のσの方が一点、『ここにおいて生きる』という事では絶対に上なのだ。

「ぶーぶー！ それにしてもイプちゃんの神威つて最強で無敵だね。」

「ほぼ何でもできるなんてチートも程があるよね」

「まあ、ボクの力は確かに幅広い事ができるけど……」

そう言つてεはσの方を見て深くため息を吐いた。

火には水と言わんばかりのこの相性。

とことんまで2人の相性は悪かった。

「あ、そろそろ始まるみたいだよ？」

『皆様、長らく、長らくお待ちせ致しました！』

これより、本日のメインイベント「極東の聖人VS蛮族のトラスコ」を開催致します！」

司会役のアフロの男がそう言った瞬間、観客席から大きな歓声が上がった。

なんせ、ここに集まった彼らはこの一戦のためにここにいると言っても過言では無いのだ。

『さあ早速、選手入場と行きましょう！』

西から現れるのはこの男、蛮族の2つ名を持ち、バトルアックスを自由自在に振り回す最強の斧使い！

トラスコオオオオ！』

「『うおおおおおッ！』」

『本日この場でプレイヤーランキングの18位であるこの男は一体、あの極東の聖人を相手にどのくらいの健闘を見せつけてくれるのか!?!』

そういう紹介で現れた男はかなり大型でいかにもその辺のチンピラといった感じの風貌をした男だ。

ただ、それなりには強いのだろう。

血統の対戦相手が誰だか分かる前には彼の方へと賭けるプレイヤーがかなり多かったようだ。

「ふむふむ、私が行ったら確かに1秒くらいはかかるかもしれませんがね。

でもイプちゃんなら時間の概念を無視して産まれる前には殺せそうですね。うですよね……」

「ボク達の基準で物事を考え無い方がいいよ。

それに目玉は彼じゃないんだ」

「では強いのは聖人の方、という訳ですね。

もしかして惚れました?」

「……何を言っているのかな?」

何を言っているんだコイツ、拷問でもして遊ぼうかな。

という考えがイプシロンの頭に過ぎった時に、再び司会役の男が声を張り上げた。

『そして、東から現れたのはもちろんあの人物。

まさか、まさかの超展開イ!?!

ゲーム開始からたったの7時間で東のボスを単身で攻略、掲示板で

有名になっていったあの男がついに表の世界へと顔を出したあ！
今東コーナーから現れたのはなあと、極東の聖人ツツツ!!』
「「聖人！ 聖人！ 聖人！」」

人々が数多く見守る中、シオンは仮面とフードをつけてそこに立っていた。

度重なる大歓声。

そして、熱い声援。

それが彼の人気を物語っていた

「なんですかアレ、思いつきり私とキャラ被ってるんじゃないですかね!？」

「確かに劣化版の君に近いけど、能力と技術は全くの別物だよ」

確かにシオンとσも不死といった似たような能力を持っているのだが、その性質は全くと言っていいほど違う。

シオンの不死能力はこの世界に思いつきり依存したものだが、σの力は世界樹が減んだとしても別の世界樹で平然と使う事もできるはずだ。

それに、彼の技術は何かしらの能力によって得た力では無い。

ゲームという箱庭の世界を通して自らの魂に刻み込み、積み上げていった才能と努力の結晶であり、それは紛れもない彼自身の手で積み上げられたものに他ならない。

『育神流合気柔術』、彼がそう呼んだその格闘技術の集大成はまるで容易く神をも捻る。

σが神威と呼ぶ力、つまりは超越者達の領域と比べると本当に小さな力。

けれどもそれは、HP0、死体同然な状態の体で諦める事もなく前に前にと突き進み続けてようやく彼が掴んだ力だ。

『ルールは非常に簡単！ 先に相手のHPを半分未満にした者の勝ち！』
アイテムの使用無し、魔法有り、スキル有り、武器防具自由の戦い！
さあ、終わりの鐘がなる時にたっているのは一対どちらなのかあ
くッ！』
「準備はいいか？」
「ああ、いつでも構わねえぞ」
『デュエル開始〜イ！』

開幕と共に突っ込んだのは蛮族、トラスコの方だった。
その大きな斧を軽々しく扱い、全速力でシオンへ向けて大きく横に
薙ぎ払いを放った。

「ほえ？ い、今何が？」
「ボクが見込んだだけあつて凄いだらう？ あれが育神流合気柔術だ
よ」

シオンはトラスコの斧の振りにキツチリと間合いを合わせ、前に出
るようにして外側から腕を取ったのだ。
もちろんそれだけでは終わらず、斧を横に振る彼の腕を押すことで
斧を振るった彼の力をそのまま利用して地面へと叩きつけた。
まさに合気としか言えない神業だ。

「うおらアー！」

しかし、蛮族の方も確かに強いようで叩きつけたダメージを転がる
ようにしてなるべく殺して即座に立ち上がると再び斧を振るった。

「無駄だ」

「い、行ってきます！」

そう言って飛び出そうとしたσの首にεの手が添えられた。

「はいはい、帰ろうね」

「いやああああああ！」

2人の超越者は、その場になんの痕跡も残さずに消え去った。